僕はホトヽギスの片隅で出鱈〔目〕をならべて居れば夫で滿足なのでそんなに方々へ書き散らす必要はないのです。……文庫といふ雜誌の六號活字がよく僕のわる口を申します。……文章でも一遍文庫へ投書したらすぐ褒め出すでせう。……段々秋冷になりました。今日は洋服屋を呼んで外套を一枚、二重廻を一枚あつらへました。一寸景氣がいゝでせう。猫の初版は賣れて先達印稅をもらひました。妻君曰く是で質を出して、醫者の藥禮をして、赤ん坊の生れる用意をすると、あとへいくら殘るかと聞いたら一文も殘らんさうです。いやはや。一寸此位で御免蒙ります。又ひまが出來たら何かかいてあげます。

十一月九日.

金

三重吉様

三重吉さん。先生様はよさうぢやありませんか、もう少しぞんざいに手紙を御書きなさい。あれはあまり叮嚀過ぎる

九一

十一月十日　午前零時十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
芝區琴平町二番地朝陽館野間眞綱へ（三三）〔はがき〕

拜啓本日洋服屋參り豫定の如く新誂のもの申しつけ候。御手數難有存候。薤路行の批評も難有候。あの手紙は三日の消印あるにも關せず七日に到着馬鹿〔々々〕しいぢやげーせんか。附箋も説明も何もありやせん。夫から遞信大臣に逐一事情を報告に及んでやりました。僕が大臣に手紙を出したのは生れて始めてゞす。尤も遞信大臣の名を知らなかつたから二三人に問ひ合して大浦君だといふ事を確めてかいてやりました。あの手紙を見て郵便配達の取締を嚴にして、且延着の理由を僕の所へいふてくれば大臣だが、平氣で居るなら馬鹿だ――ねー君。

九二

十一月十一日　午後五時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
芝區琴平町二番地朝陽館野間眞綱へ（三四）〔はがき〕

野間君。小澤〇〇は詐欺師なる事相分り大變な奴ですよ。文科大學助教授文學士小澤〇〇なる名刺をふり廻し諸所をごまかしてあるく由。――昨日内田不知庵から注意が參り。本日は神泉に關係の畫家古城天風二君參り多額の畫をかたられた話を致し候。御用心の事。全體どうしてあん

なものを紹介したのかね。僕の名前なんか方々へ行つて振り廻す由

九三

十一月十三日 午後五時十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
本郷區本郷六丁目二十五番地藪中方野村傳四へ（三三）〔はがき　表の署名に「なつめきむ」とあり〕

君の盡力に因つて眞砂座を見る筈の處少しく都合が出來て同行が出來ぬから一人で行つてくれ玉へ

手のない人に手を出せといふのは愚物に賢人になれといふ樣なものだ是は近頃失敬の至であつた然し僕抔はない學問を出して講義をする位だから學生の方でもない手位はだしてもよさゝうに思ふ

九四

十一月十五日 午後五時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
本郷區本郷六丁目二十五番地藪中方野村傳四へ（三四）〔はがき〕

昨夜下駄物語をよむ。うまく出來ました。文章が段々上手になつてくる結構々々。あれはあとがあるのだらうね。あれ丈では纏まらない。あの茶屋の所は寫生だね。どうも寫生は無理がないから生きて居る。

九五

十一月二十六日 午前零時（ママ）十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ（八）

御手紙拜見文章會を來月九日にしては如何との御問合せ別段差支もなささうなれど夫迄に猫が出來るや否やは問題に候。帝國文學は十五日迄に草稿が入用のよし。實は帝文をさきへ書いて然る後猫に及ぶ量見の處此方が未だ腹案がまとまらずどれをかゝうかあれにせうかこれにせうかと迷つて居る最中然もどれもこれもいざとならぬと纏つた趣向がないのでまだ手を出さずに居る夫故に此方を三四日中にかき出してかりに一週間と見れば大丈夫夫から猫とすると是も長くなるかも知れないが一週間あれば安心すると九日の開（原）ではちとあぶない其次の土曜ならよからうと思ひます。尤も小生近來は文章を讀む事が厭きた樣だから自分に構はず開いて頂戴猫は出來れば此方から上げます。一體文章は朗讀するより默讀するものですね。僕は人のよむのを聞いて居ては到

底是非の判斷が下しにくい。いづれ僕のうちでも妻君がバカンボーを腹から出したら一大談話會を開いて諸賢を御招待して遊ぶ積に候　頓首

十一月二十四日

虛子先生　　金

僕は當分のうち創作を本領として大にかく積りだが少々いやになつた。然し外に自己を發揮する餘地もないから矢張り雜誌の御厄介になる事に仕つた

此度の猫は色々かく事がある。其内で苦沙彌君の裏の中學校の生徒が騷いで亂暴する所をかいて御覽に入れます

九六

十二月四日　午前零時十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より

芝區琴平町二番地朝陽館野間眞綱へ（三五）〔はがき〕

御邸の御嬢さんが病氣ぢや大變だ。若い美しい女の病氣程世の中に大事件はない。御用心御用心

十二月三日

九七

十二月四日　午前零時十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より

麴町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ（九）

拜復

十四日にしめ切ると仰せあるが十四日には六づかしいですよ。十七日が日曜だから十七八日にはなりませう。さう急いでも詩の神が承知しませんからね。（此一句詩人調）とにかく出來ないですよ。今日から帝文をかきかけたが詩神處ではない天神樣も見放したと見えて少しもかけない。いやになつた。是を此週中にどうあつてもかたづける。夫からあとの一週間で猫をかたづけるんです。いざとなればいや應なしにやつゝけます。何の蚊のと申すのは未だ贅澤を云ふ餘地があるからです。桂月が猫を評して稚氣を免かれず抔と申して居る恰も自分の方が漱石先生より經驗のある老成人の樣な口調を使ひます。アハヽヽヽ。桂月程稚氣のある安物をかく者は天下にないぢやありませんか。困つた男だ。ある人云ふ漱石は幻影の盾や薤露行になると餘程苦心をするさう

だが猫は自由自在に出來るさうだ夫だから漱石は喜劇が性に合つて居るのだと。詩を作る方が手紙をかくより手間のかゝるのは無論ぢやありませんか。虚子君はさう御思ひになりませんか。薤露行抔の一頁は猫の五頁位と同じ勞力がかゝるのは當然です。適不適の論ぢやない。二階を建てるのは驚ろきましたね。明治四十八年には三階を建て五十八年に四階を建てゝ行くと死ぬ迄には餘程建ちます。新宅開きには呼んで下さい。僕先達て赤坂へ出張して寒月君と藝者をあげました。藝者がすきになるには餘程修業が入る能よりもむづかしい。今度の文章會はひまがあれば行くもし草稿が出來ん樣なら御免を蒙る。　以上頓首

十二月三日

虚子先生

金

九八

十二月九日　午後三時五十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
本郷區本郷六丁目二十五番地藪中方野村傳四へ（三九）〔はがき〕

傳四先生下駄物語につき明星でわる口をかいて居る御覽なさい。今日の文章會は休席。帝文の原稿がまだ出來ない。人がこない樣に手筈をすると思ひがけない人がくる。然り而して僕も其實あまりかく氣が御座らん。猫もかゝなくてはならん。

僕は小說家程いやな家業はあるまいと思ふ。僕なども道樂だから下らぬ事をかいて見たくなるんだね。職業となつたら敎師位なものだらう。島津の御孃樣はとんだ事をした。僕が代理に死んでやればよかつた。

九九

十二月十一日　午前六時二十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
麴町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ（一〇）〔はがき〕

時間がないので已を得ず今日學校をやすんで帝文の方をかきあげました。是は六十四枚ばかり。實はもつとかゝんといけないが時が出ないからあとを省略しました。夫で頭のかつた變物が出來ました。明年御批評を願ひます。猫は明日から奮發してかくんですが、かうなると苦しくなりますよ。だれか代作を賴みたい位だ。然し十七八日迄にはあげます。君と活版屋に口をあけさしては濟まない。

一〇〇

十二月十八日　午後二時二十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ（一）

啓　先刻の人の話では御孃さんが肺炎で病院へつめきりださうですね少しは宜いですか。大事になさい

僕の家バカンボ誕生矢張女です。妻君發熱猫はかけないと思ふたらすぐ下熱先々大丈夫です。猫は一返君によんでもらう積りで電話をかけたのですが失望しました。はじめの方のかき方が少し氣取つてる氣味がありはせんかと思ふ。夫から終末の所はもつと長く書く筈であつたがどうしても時間がないのであんな風になつたんです。

此二週間帝文とホトトギスでひまさへあればかきつゞけもう原稿紙を見るのもいやになりました是では小説抔で飯を食ふ事は思も寄らない。

君何か出來ましたか。病人抔の心配があると文章抔は出來たものぢやない。

今日はがつかりして遊びたいが生憎誰もこない。行く所もない。

先々正月に間に合ふ様に注文通り百枚位書いて安心しましたよ

十八日

虛子様

金

一〇一

十二月二十四日　午後三時五十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
廣島縣佐伯郡中村下田方鈴木三重吉へ（五）

只寒し封を開けば影法師

一〇二

十二月二十四日　午後三時（以下不明）　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
麹町區三番町十番地市來松風氏へ

啓

猫のこよみわざ〳〵御持參被下難有頂戴致しますあんな妙なこよみは見た事がありません柱に

かけて眺めて居ります。
風呂敷を置いて行かれました。當分の間御あづかり申します。其内遊びに入らつしやい。
來年正月のホトヽギスには長いのをかきましたどうぞ讀んで下さい。面白くない所があつたら
遠慮なく注意して下さい。先は右御禮迄　匆々頓首

十二月二十四日

松風雅兄　　金

一〇三

十二月二十九日　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
本所區茅場町三丁目十八番地伊藤左千夫氏へ

拜啓只今ホトヽギスを讀みました。野菊の花は名品です。自然で、淡泊で、可哀想で、美しく
て、野趣があつて結構です。あんな小説なら何百篇よんでもよろしい。三六頁の
民さんの御墓に參りに來ました
と云ふ一句は甚だ佳と存じます。只次にある「只一言である云々」の説明はない方がよいと思ひ
ます
小生帝文に趣味の遺傳と云ふ小説をかきました君の程自然も野趣もないが亡人の墓に白菊を手
向けるといふ點に於て少々似て居りますから序によんで下さい。
押しつまつて御多忙の事と存じます。新年は缺禮致します　以上

十二月二十九日

伊藤大兄　　金

一〇四

十二月三十一日　午後三時五十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ（二）

拜啓本日書店より藝苑の寄贈をうけて君の病葉を拜見しました。よく出來て居ます。文章抔は
隨分骨を折つたものでせう。趣向も面白い。然し美しい愉快な感じがないと思ひます。或は君は
既に細君をもつて居る人ではないですか。それでなければ近時の露國小説抔を無暗によんだんで
せう。どつちから來たか知らんが書物か、實地から來たに相違ない。然しあれをもつと適切に感

ぜさせるのはあの五六倍かゝないと成程とは思はれないですよ。凡ての因縁ものは因縁がなる程と呑み込める様に長たらしくかゝんと面白くゆかぬ様に思ひますがどうですか。あれで惡いといふのではない。長くしたらもつと面白く見えるだらうと云ふのです。あゝ云ふ裏面の消息は表面の戀をかき盡して種切れになつた時に考へ出すか又は自分が經驗を積んで表面の戀が馬鹿々々しくなつた時に手をつけるものだ。君の若さであんな事をかくのは書物の上か又は生活の上で相應の源因を得たのでありませう。ホトヽギスに出た伊藤左千夫の野菊の墓といふのを讀んで御覽なさい。文章は君の氣に入らんかも知れない。然しうつくしい愉快な感じがします。　以上

十二月三十日夜

金

白楊兄

今朝又讀み直して見ました。あれを今少々活躍させる工夫があると思ひます。あれ丈の短篇では今少々活躍させんと完璧とは云はれない。それでなければもつと長くかく。　三十一日

一〇五

一月一日　午前零時―五時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
廣島市袋樂町鈴木三重吉へ（六）

加計君の所へいつか手紙をやりたい。宿所を敎へ玉へ

拜啓

御通知の柿昨三十日着直ちに一個試みた處非常にうまかつた。コロ柿は堅過ぎるがあれは丁度好加減です。小供にもやりました。君の神經衰弱は段々全快のよし結構小生の胃病も當分生命に別條はなささうです。君が芝居をやる抔は頗る見ものだらうと思ひます。全體何の役をやる積りか一寸御一報にあづかりたい。今日は大晦日だが至つて平穩借金とりも參らず炬燵で小說を讀んで居ます。ホトヽギスを見ましたか。裏の學校から抗議でもくれれば又材料が出來て面白いと思つて居る。此學校の寄宿舍がそばにあつて其生徒が夜に入ると四隣の迷惑になる樣に騷動する。今夜も盛にやつて居る。此次は是でも生捕つてやりませう。仕舞には校長が何とか云つてくればいいと思ふ。喧嘩でもないと猫の材料が拂底でいかん。伊藤左千夫の野菊の墓といふのをよんだですか、あれは面白い。美くしい感じする。一昨日から雪今日も曇中々寒い。昨日は中川が來ました。君が芝居をやる所を猫にかきたい。多々良三平と自認せる俣野義郎なるもの五六度も親展至急で大學へむけ猫中の取消を申し來る。新聞で廣告して取り消してやらうかと云つたら御免と云ふてきました。當人は人格を傷けられたとか何とか不平をいふて居る。呑氣なものである。人身攻

擊も文學的滑稽も區別が出來ないで自ら大豪傑を以て任じて居るのは餘程氣丈の至りだと思ふ。

君早く出て來給へ

早稲田文學が出る。上田敏君抔が藝苑を出す。鷗外も何かするだらう。ゴチや〳〵メチや〳〵、其間に猫が浮きつ沈みつして居る。中々面白い。猫が出なくなると僕は片腕もがれた樣な氣がする。書齋で一人で力味(原)んで居るより大に大天下に屁の樣な氣燄をふき出す方が面白い。來學年から是非出て來給へ

明日丸山通一といふ獨乙語の先生の所へ午飯に呼ばれた。何の因緣か分らないがまづ御馳走になる方が得策だと思つて承引した。

うれしきも悲しきも眼前の現象　月も花も刻下の風流。定業は何十年か知らないが、御馱佛となる迄はまづ〳〵此の如くであらうと思ふ　珍重

三十八年大晦日の夜

三重吉　様　　金

今日野村傳四と上野を散歩したら、耶蘇教の戸外演說があつた。聞き手は一人もない。大晦日である。人間は衣食の爲めには狂氣じみた事も眞面目にやるものですな。其例澤山あり。

明治三十九年

一

一月四日　午前（時間不明）　本郷區駒込千駄木町五十七番地より松山市下京町小島武雄氏へ（二）

拜啓賀狀拜見致候吉松氏任地にて評判よろしき由本懷の至うれしく候拙作御通讀被下候由難有奉謝候本年も相變らずつまらぬものをかゝねばならぬ事と存候御覽被下候はゞ幸甚に候。本年より早稲田文學藝苑其他にて文壇も大分賑やかになり候。其間に立ちて出頭沒頭の陋態を極め候事大悟の達人より見ば定めし可笑しからんと折々は自らさへも失笑致候先は御返事迄　匆々頓首

三十九年一月三日　　金之助

小島　様

二

一月八日 午前（時間不明） 本郷區駒込千駄木町五十七番地より
本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田来松へ（二）

啓、長い手紙を頂戴面白く拜見致しました。御世辭にも小生の書翰が君に多少の影響を與へたとあるのは嬉しい。夫程小生の愚存に重きを置かれるのは難有いと云ふ譯です。小生は人に手紙をかく事と人から手紙をもらふ事が大すきである。そこで又一本進呈します。

「野菊」を御讀みの由。詳細の御評拜見御尤もの事ばかりです。今度作者に逢つたら見せてやります。定めし喜こぶでせう。あの男は職業は牛乳屋で子規存生のみぎり一所に歌を研究して今でもアシビといふ雜誌を出して居る。小生は二三度會したぎり交際もない人です。あの作も一句一句吟味すると技巧の上では大分足らぬ所があると思ふ。君は讀むまいが矢張り前のホトヽギスに出た寺田寅彦と云ふ人の「團栗」とか「龍舌蘭」とかいふ作の方が遙かに技倆上の價値がある。只野菊に取るべき所は眞率の態度を以て作者が事件を徹頭徹尾描き出して居る點である。あれ丈の材料を普通の小説家がとり扱つたならもつと似非藝術的なものにして仕舞ふと思ふ。そこが賴母しい所だと思ふが、どうです。趣向は仰せの如く陳腐です。寧ろ月並臭を脱しない。然し仰せの如く月並臭くないからいゝ。それから君の非難をする箇所は一々尤もである。僕も多少さう思

ふ。但し女が死んでからの一段はあれでいゝ實際です。尤も君の云ふ樣にすれば死といふものに對して吾人の態度が違つてあらはれてくる許りである。死に崇高の感を持たせやうとするときは、其方を用ゐるがよいと思ふが、死に可憐の情を持たせるのは、あれでなくてはいかぬ。野菊の行きがゝりから云ふてあれでなくてはものにならない。調和せんと思ふ。死は一つである。然し吾人の死に對する態度は色々ある。此態度如何で讀者の感じが違つてくる。然も其色々な態度が皆眞といふ事がいへると思ふ。

女が猿股をいやがる所や、笠を被らない所は妙ですよ。つまり君の云ふ如く、あんな所で活動すると思ふ。女が死んで寫眞を持つて居るのは寧ろ幼稚です。もつと上等に行けばそんな眼に見えるものを持たないでそれ以上の感じを起させるがいゝ。然しそれは中々大手腕が入る。前後の關係から云つて、寫眞を握つて居たので一種の趣意が貫ぬいて、女の病死に落ち付きが出來るといふ點から見れば何にもかゝないより善い。

病葉に就いて一言蛇足を添へるが。主人公が何だか六づかしい本を讀んで居る。あれは必要があるのですか。突然あれを讀むと。故意にあんな本を讀ませて居る樣な、初心な氣障な感じがする。もつと長いもので主人公が一種の人物であんなものを讀むべき傾向を有して居るか、又はあの本があの短篇中に一種の關係を有して居るなら故意とは思はれなかつたらう。尤も後段に一寸關係が出るがあれ丈では、あんな本をよます必用はないと思ふ。

容赦なく云へば君は文に凝り過ぎて失敗しさうな懸念が僕にある。あまり凝ると拔目がない代りに何となく窮屈な苦しい感じがするでせう。第一長いものは到底根氣がつゞかないと思ふ。

僕は君の文が出る度に讀みます。さうして時間の許す限り、心づく限りは愚評を加へる積りです。其代り惡口を云つても怒つてはいけません。大學では君の先生かも知れないが個人として文章抔をかく時は同輩である。決して僕に對して氣を置いてはならぬ。君はあまりに神經的、心配的、人の心を豫想しすぎる樣な傾向がありはせんかと思ふ。他人に對してはとにかく僕に對してはさうせん方がいゝ。君も氣樂でいゝでせう。野村傳四抔は氣樂なものである。あまり長くなるから是でやめます。　不一

一月七日

森田兄

金之助

三

一月十日　午後二時―三時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ（三）

又手紙をあげます。もう少し立つと色々多忙になつて到底返事らしいものはかけないから只今少々ひまのあるのを幸にこれをかきます

君は大分長い手紙をかいてよこしましたね。あれ丈かくのは大分時間をとるに相違ない。僕の爲めになんな勞力を費やさしたと思ふと中々賴母しい心持ちで讀みました。何か不平でも氣餒でも洩したい時に時間があつたらいつでも僕の所へ云つて寄こしてくれ玉へ。僕は讀むのを樂しみにして居る。其代り必ずそれに匹敵する長い返事は出されないかも知れません。

野菊の墓の評をかいて下さる由定めし本人（卽ち牛乳屋の主人）はよろこぶだらう。どうかかいてやつて下さい。左千夫なんて聞いた事もない人だから誰も相手にしてはくれん。切角出色の文字でも誰も相手にせんでは甚だ氣の毒である。君が評をしてやれば僕も何だか愉快な氣がする。而も君の評は十中八九迄僕と同樣であると思ふから猶更愉快である。然しわるいと感じた所は遠慮なく云ふてやつて下さい。本人の參考になります。

牛乳屋が氣に入つたといふのは見上げたものです。牛乳屋の主人の方が大學の講師よりも氣韻があると思ふ。顏も頗る雅な顏ですよ。あんなものがかけさうでもない。

君は衣食の爲めに充分學問が出來んのを苦痛に感じて居る樣だが御尤もです。僕も貧乏で十八九の時から私立學校を敎へて卒業迄やり通したが其時分は別に何と云ふ考もなかつたから左程驚きもしなかつた。是が今日の君の樣であつたら矢張り大煩悶であつたらう。夏休みに金がなくつ

て大學の寄宿に籠城した事がある。而して同室のものゝ[原]の置き去りにして行つた蚤を一身に引き受けたのには閉口した。其時今の大塚君が新しい革鞄を買つて歸つて來て明日から與津へ行くんだと吹聽に及ばれたのは羨やましかつた。やがて先生は旅行先きで美人に惚れられたと云ふ話を聞いたら猶うらやましかつた。

僕もその時分から眞の勉强（君の所謂ウイスドムを得る工夫）でも熱心にしたら今はもう少し人間らしくなつてるだらうと思ふ。其時分は本の名前を覺えて人に吹聽するのが學者だと思つて居た。趣味抔も低いものであつた。物の道理も今の若い人程は到底わからなかつた。要するに今でも愚物であるが當時は猶々愚物であつた。尤も見識はあつたが、只人を下げる見識で自分が證得したボジチーヴの見識ではなかつた。

僕もそれだから大に聰明な人になりたい。學問讀書がしたい。從つてどうか大學をやめたいと許り思つて居ます。先達晩翠が年始狀をよこしてまだ教授にならんかと云ふから「人間も教授や博士を名譽と思ふ樣では駄目だね。失樂園の譯者土井晩翠ともあるべきものがそんな事を眞面目に云ふのはよくない。漱[原]石は乞食になつても漱石だ……」と云ふ樣な事をかいてやりました。あとで成程小供らしい氣燄だと氣がついた。

君が人の作を讀む態度[原]は甚だよろしいと思ふ。それでなければクリチシズムは出來ない。只人の長所を傷けない丈の公平眼は是非共御互に養成しなければならん。僕は人の作に對して只面白く讀みたい。よんでやりたいと云ふ氣が先へ起る。然し讀んで仕舞つて是は敬服したといふ樣なものはあまり少ない。矢張り西洋人の方がそんな感じを引き起させる事が多い。然し西洋人だからといつて決して一目置いて讀むのではない。二三日前鏡花の海異記とか云ふものをよんで驚ろいた。どうも馬鹿々々しいと云ふ感より外に起らなかつた。それから彼の文章のかき方がいやに氣取つて居て嫌だと云ふ感じがあつた。警句は無論澤山ある。あれをなぜもつとうまく繫げないのかと思ふ。かう感ずるが僕は鏡花に對して憎惡心も何も有して居らん寧ろ好意を以て迎へよむのである。こんなのは矢張り天性の趣味の相違でありませう。

君の手紙をよむと君の人間を貫ぬいて見る樣な心持ちがします。君と二三月交際しても、あれ程には分るまい。人に自己を打ち明けるといふ事は放膽の所爲である。打ち明けられた人は其放膽をほめるのではない。他に打ち明けぬものを自分にのみ打ち明けてくれたと云ふ特許を喜ぶのである

自分の弱點に對しては二樣に取り扱ふ方法がある。一は之を隱して自己の虛榮心を失望させまいとする。是は誰でもやつて居ます。僕もやつて居ます。然し決して滿足が得られるものではない。一はコンフエッションである。然し無用の人若しくは此コンフエッションをきいて之を輕蔑する人若しくは之を利用して害を加へやうとする人には自白したくない。だから此場合には己れの信ずる人、若くは敬する人、或は敎を垂れて訓戒してやらうと思ふ人に自白するのである。其

時は甚だ愉快を覺えるものだ。單に本人が愉快を覺えるのみならず。相手も快よく思ふ。君がもし君の書中に自己の弱點も構はず吐露したとすれば、其點に於て君は愉快である。僕が君の自白を聞き得たる相手とすれば僕も愉快である。

これからはいそがしくなるといつこんな長い手紙をあげられるか分らない。一先づ是で擱筆とします。以上

一月九日夜

金之助

森田兄

四

一月十四日 本郷區駒込千駄木町五十七番地より
清國南京三江師範學堂菅虎雄氏へ（一〇）

拜啓平生は御無沙汰をして濟まん。年禮も賀狀も今年は全廢として見たが矢張り中川元さん抔からくるとさうも行かぬ。君の留守宅へも失敬して仕舞つた。いづれ妻がまかり出る。僕のうちでは又去年の暮に赤ん坊が生れた。又女だ。僕の家は女子專門である。四人の女子が次へ次へと嫁入る事を考へるとゾーッとするね。貯蓄をせんといかん。然るに去年の十二月抔は色々かゝつて三百圓近く仕拂つた。幸ひ著作の印稅があつたので間に合つたが何しろ。金の入るのには驚くね。君は出來る丈貯蓄をせんとゆかぬ。君に返す金は矢張り十圓宛にして居る今年中位で濟むだらう。東京も別段變つた事もない。近頃は天氣がいゝ。狩野も大塚も藤代も例の如くだ。藤代位學校を欠勤する男は珍らしいね。僕大學をやめて江湖の處士になりたい。大學は學者中の貴族だね。何だか氣に喰はん。ホトトギスを君の所へ送る樣に依賴して置いたが行くだらうね。四月には歸るまいね。居られるならそちらに居るがいゝと思ふ。東京に口はなさゝうだ。まあ此位にして置かう此手紙は君が吳れた純羊毫でかいたのだいつ迄立つても字はうまくならない。君の字は立派なものだ。御寺の額にでもありさうだ。繪端書には堅過ぎて釣り合はない　以上

正月十四日

金

虎雄樣

五

一月十六日 午前零時—五時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より

芝區琴平町二番地朝陽館野間眞綱へ（三六）

今夜野村が雉子と卷紙を持つて來てくれました。御親切にありがたう存じます。あの紙は妙な紙だね。此紙は寺田が高知から持つて來てくれたものだ。先達ては橋口が白紙の卷紙をくれた。其前は菅が唐紙を支那から持つてきてくれた。僕は紙大盡だ。今年中は紙を買はずに濟む。君憂鬱病のよし結構に存候。憂鬱も快活も全く本人の隨意と存候。小生抔は一日に兩方やり申候。昨日は野村と日本橋、神田、淺草を散歩致し候。柳橋で藝者に逢ひ候。其外竹本組玉、竹本團洲、郡々逸坊扇歌の家をつきとめて歸り候。皆川には頓と逢はず候。　頓首

正月十五日

眞綱様

金

三九四

島津の若大將には此方から禮狀を出す

六

一月十七日　午後四時―五時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より

芝區三田君塚町十番地行村方皆川正禧へ（八）

尊書拜讀野間は憂鬱病に罹つた由を申來候けしからぬ事に候。三十にもならないで憂鬱病抔と申す贅澤な事を申し候。

其後はしばらく拜顏の期を得ず。不相變餅を食つて御消光の事と存候。小生も例の如く漫然と消光致し居候。其うち會食でも致し度と存候

趣味の遺傳御讀み被下難有候。結末の一氣呵成の所をほめて下されたのは望外の幸福と存候。實は時間がたりなくて、かけなかつたのです、仕舞をもつとかゝんと、前の詳細な敍述（原）な比例を失する樣に思ひます。

あれは誤植誤字だらけであります。

野菊の墓の末段をわるく云ふ人は君の外にあります。森田二十五絃が同樣の事を云つて來ました。僕はさうも思はない。東京邊の家庭にはこんな御シャベリな婆さんがあるものだと存候。

野間が雉子を屆けてくれました。是は島津の若旦那の御見やげです。昨夜無暗にたべた所今日腹がわるく候。

いづれ其内　草々

十六日

金

三九五

七

一月二十六日　午後三時—四時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ（二）

其後御無沙汰仕候二月のほとゝぎすに何か名作が出來ましたか。僕つら〳〵思ふにホトゝギスは今の樣に毎號版で押した樣な事を十年一日の如くつゞけて行つては立ち行かないと思ふ。俳句に文章にもつと英氣を鼓舞して刷新をしなければいかないですよ。と申して別に名案もないから只主人公たる君が大奮發をするより外に仕方がない。文庫新聲抔一時景氣のよいものが皆駄目になるのは時候後れだからと思ひます。ホトゝギスも賣れるうちに色々考へて置かぬとならんでせう。

先づ卷頭に毎號世人の注意をひくに足る作物を一つ宛のせる事が肝心ですね。夫から君は毎號俳話をかいて、四方太は毎號文話でもかいたらどうです。四方太は原稿料が出ないと云つてこぼして居るがあの男はいくら原稿料を出しても今の倍以上働くかどうか危しいものだ。とにかくもつと活氣をつけたいですね。小生餘計な世話を燒いて失敬だがホトゝギスが三四千出るのは寧ろ異數の觀がある、決して常態ではない油斷をしては困る事になると思ひます。

そんなら僕に何かかけと來るかも知れんが僕は取りのけ別問題です。一寸手紙をかく序があるから是を差し上げます。苦い顔をしてはいけません　頓首

一月二十六日　金

虛子樣

八

二月三日　午後三時—四時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
芝區琴平町二番地朝陽館野間眞綱へ（三七）

拜啓

先日皆川君のうちへ行く約束はしなかつた都合によつたら行くと申してやつた。然し待つて居たのは氣の毒である。小生例の如く毎日を消光人間は皆姑息手段で毎日を送つて居る。是を思ふと河上肇などゝ云ふ人は感心なものだ。あの位な決心がなくては豪傑とは云はれない。人はあれを精神病といふが精神病なら其病氣の所が感心だ。君の憂鬱病はどうなつた。金を百圓許り借り

て大に青樓に遊んで見たまへ。大抵の憂鬱病は屹度全快する。放蕩は長く續くものではない。放蕩をつゞけると放蕩の方の憂鬱病が出てくる。さうしたら又勉强をする。又憂鬱病になる。又何か道樂をやる。是で澤山だ。是を姑息手段といふ普通の人間は大概やる。君は此姑息手段さへやらんから病氣になるのである。

近頃は訪問者が少々減じて難有い。忙しい事は依然として忙がしい。生涯此有樣であらう。而して生涯落ちつく事はない。僕のキュー〳〵して居るのも亦姑息手段に過ぎぬ。要するに大俗物になつて益大俗物たらんとアセルのだね。是ではどこがえらいか分らない。人間は他が何といつても自分丈安心してエライといふ所を把持して行かなければ安心も宗教も哲學も文學もあつたものではない。　頓首

二月三日

眞綱様

金

九

二月六日　午後三時―四時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より

芝區琴平町二番地朝陽館野間眞綱へ（三八）

拜啓陸軍の英語教師の口があつた由何より結構の事と存候實は君の口に就ては内々心配して居つたが是で僕も安心した精出して御勤めなさい決してなまけてはいけません。其内月給が上つて美人の妻君がもらへます。

金がとれて地位が出來ると憂鬱病も退散するだらうと思ふがどうですか。僕なんか百萬圓もらつても憂鬱病だね。呵々

二月五日

眞綱様

金

一〇

二月七日　午前零時―五時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
本郷區本郷六丁目二十五番地數中方野村傳四へ（三六）

謹白傳四先生足下

僕の友人の西洋人が乃木將軍の傳をかくといふので吉田松蔭の著書を知りたいと申すが君だれ

かにさくか一寸圖書館で見てくれないか。尤もどこで賣つてるか分れば猶よい。夫から福地櫻癡の幕末記事は今賣つてるかね。いくらでどこに賣つてるか教へてくれ給へ。櫻癡といふ人の逸話を讀んだがあれは駄目な人間だ。然し當人は餘程えらいと思つてる。生前は可成有名でも死ねばすぐ葬られる人だ。一寸學校の成蹟はよくても卒業して駄目になると同じ事だね。然しあんな淺薄な人間でも人から大にもて囃されるのだから殊に女から屢惚れられるのだから妙なものだね。ざうなると女に緣が遠い程えらい人といふ譯だな。君なんか少しは奢つてもいゝ。

三月には猫のつゞきをかく積りで居る。レクチュアはまだ一枚もかゝない。それで毎日々々何か蚊にか忙がしい。今度の猫に惡口をいふ材料はないかね。落文館なんか相手にならんから今度はやめにして又金田令孃の御見識でもかゝうかと思ふ。

先達て女から手紙が來たよ夏目先生御許へとかいてある。見たければ御見やげを持つて居らつしやい。但し有體にいふと來ない方がいゝ　再拜

二月六日

傳四先生　　金

一一

二月十一日　午前十一時—十二時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
廣島市猿樂町鈴木三重吉へ（七）

昨夜君の手紙がつきました。加計君が結婚をしたのは御目出たい。男爵の娘だなんてそんなものが山の中で役に立つでせうか。然しそれは餘計な事だ。とにかく御目出たい。君小說をかいたら送り玉へ。早く拜見仕りたい。近頃は色々な雜誌屋や何か來ていやになつて仕舞ふ。文章も作るひまがない。芝居は是からやるのですね。東京でも坪內さんの門下生がやりますよ。押入のなかで三味線をひくのは近世奇人傳にでもありさうだ。そんな事が出來れば病氣はまづ大丈夫ですね。猫の原書をかひにくるのは猫中の材料だ。色々な人があるものだ。大町といふ男が猫をよんで作者は氣の小さい陰氣な少し洒落氣のある男だと二度も三度も繰り返して居る。人民新聞といふのには僕が猫を作つて以來細君と仲が惡るくなつたとあるさうだ。すると高等學校で其さり拔きを大事に校長に御目にかける。內田魯庵といふ男は夏目君は金田夫人に談判されて迷惑して居るさうだとある男に話したさうだ。

僕も此位有名になれば申分はないと思ふ。昔はこんな事が氣にかゝつて一々正誤しないと心持ちがわるかつた。今では却つて面白い心持ちがする。是から文章でもかいてながく居ると益僕の

惡口をいふものが出て來ます。仕舞には漱石は昨日死んださうだ。いや瘋癲院へ這入つた。華族の御嬢さんから惚れられたなんて妙なのが出て來るでせう

今日は紀元節でいゝ天氣です。一昨日は雪でね。大變積つた。今日も道がわるい。昨夜は中川や何か四人ばかり來て夕飯をくつて快談をして暮らしました。

廣島といふ所はどんな所か行つて見たい。廣島のものには僕の朋友が少々ある昔は大分つき合つたものだ。猫のうちにある甘木先生も廣島の人だ。毎日役々としてくらすのが人間の目的だとあきらめて仕舞つたが本もよめず、樂に坐つてる事も出來ないとなると一寸弱りますね。

もつと何かかゝうと思ふがいやになつたからやめ。

加計によろしく云つてくれ給へ。妻君は美人ですか。　以上

二月十一日紀元節朝

金

三重吉様

一二

二月十三日　午前八時―九時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より

本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田来松へ（四）

尊書拜見

君の心の狀態が果して君の云ふ所の如くなれば君は少々病氣に相違ない。病氣がわるいとも云はぬ。よいとも申さぬがつまり自分が苦しむ丈不幸と云はねばなるまい。前の手紙にも云ふた如く君はあまり感じが強過ぎるので其鋭敏な感じに耽り過ぎた結果今日に至つたのであらう。そんな時には人が異見をしたつて慰めたつて容易に癒るものではない。自然に任せて於て同時に氣を晴らすより外に方法はない。そんな時に神經質な文學書抔を讀むと猶いけない。可成方面の違つた人間と話したり丸で趣味の違つた書物を讀んだり。若くは人と喧嘩をしたり。或は借金をして放蕩をして見たり。或は人に手紙を出して鬱氣を洩らすがいゝと思ふ。君は最後の手段に訴へて手紙をよこして原のかも知れないが偖僕が君に同情を表して泣言を竝べると君は多少賴りになるかも知れないが病氣は益はげしくなる。去ればと云つて冷淡な返事をすれば矢張りわるくなる。或は月並な說教がましい事を云つたら何の功能もない事となる。是には僕も少々弱るな。

僕も昔は非常に馬鹿で薄志で剛慢でしかも世人が大變恐ろしかつたが今は大分變化して仕舞つた。性格は此三四年以來いちゞるしく變化した。只氣分丈は矢張り若くて學生なんか友達の樣な氣がする。

それで近來は僕が文章をかくものだから人が色々な事をいふ。大町なんかは僕の惡口を二度も

繰返して居る。人民新聞では僕が猫をかいて細君と仲がわるくなつたとかいたさうだ。ある人は僕が金田夫人に強迫されて迷惑して居ると話したさうだ。是が十餘年前なら眞面目に辯解する所だが今日ではそんな氣は少しもない。桂月なんて馬鹿だと頭から思つてる。新聞なんて何をかかうと構はないときめて居る。なぜこんなになつたか分らない。又これがいゝとも斷言しない。然し昔より太平である。人間は太平の方が難有いに相違ない。人間として僕は決して君の師表たる樣な資格はない。然し世の中にこんなえらい人になつて見たいと崇拜する人間は一人もない。だから君も君で一人前で通して行けば夫で一人前なのだから構はんではないか。

人が笑ふから云々と云ふのは尤だが今の文壇で人の笑ふに價せざる者ばかりを作る人は殆んどない。丁度朋友其他の知人中に於て馬鹿の分子を含んで居らんものは一人もないと同じ事であらう。

先づ最前の大町桂月の樣なのは馬鹿の第一位に位するものだ。竹風先生だつてあんなものだ。樗牛なんて崇拜者は澤山あるがあんなキザな文士はない。然しみんな押を強くして平氣で居る。何も君一人が閉口する必要はない。つまらないと感じて文壇を退くなら分つてるが。何もそんなに自分丈を妙に考へる必要はあるまい。僕なんかは蔭では矢張り僕が桂月其他を目する如く批評されてるのである。然し些とも構はん。蔭で云ふ事なんかはどうでもよろしい。文章もいやになる迄かいて死ぬ積りである。

他人は決して己以上遙かに卓絶したものではない又決して己以下に遙かに劣つたものではない。特別の理由がない人には僕は此心で對して居る。夫で一向差支はあるまいと思ふ。

君弱い事を云つてはいけない。僕も弱い男だが弱いなりに死ぬ迄やるのである。やりたくなくつたつてやらなければならん。君も其通りである。死ぬのもよい。然し死ぬより美しい女の同情でも得て死ぬ氣がなくなる方がよからう。

先達て憂鬱病だと云つた男にかう答へてやつた

「借金を百圓許して放蕩をやれば憂鬱はなほる。もし放蕩を永くつゞけると放蕩の方で憂鬱病が出る。さうしたら又放蕩をやめて勉強をする。是が普通の人間のとる尤も自然の方法である。是は姑息手段であるが誰にでも出來る。然しそんな面倒な事をやつたりやめたりせんで一度に天下太平になるのは。死ぬ丈の覺悟で以て大に考へ込んで近頃はやる自覺でもしなくてはなるまい。自覺になると僕は知らない事だから一言も云へない……」

以上

十三日

森田樣

金之助

一三

二月十三日　午後五時—六時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ（五）

今日歸宅の上藝苑を拜見した。僕の文の批評は結構であります。あれは頗る比例といふ點から云つては丸駄目の作である。趣味の遺傳といふ趣味は男女相愛するといふ趣味の意味です。猫は世の中があきた抔といふ事はない。二三の氣短かな連中がそんな事を云ひたがるのだ。猫の讀者はそんなに急にあきやしない。僕のつむじは眞直なものさ。猫をかくのは立派な考だと思つてる。決してブク〳〵湧いて出ては來ない。只無暗にかいてるとあんなものが出來るのです。

天下に己れ以外のものを信頼するより果敢なきはあらず。而も己れ程頼みにならぬものはない。どうするのがよいか。森田君君此問題を考へた事がありますか　頓首

二月十四日

森田君

金

一四

二月十五日　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
小石川區指ヶ谷町七十八番地姉崎正治氏へ（一）

拜啓今日は學校で立談の際御互の意志の通ぜぬ所もあるから改めて手紙で愚存を申し上げる。實は〇〇さんが逢ひたいとか又は折り返して罫紙入りの半官文的のものをよこすと又面倒だから君迄申して置く

英語學試驗囑托辭任の事はあれで濟んだ事と思つて居た所はからずも君等に御心配をかけて相濟ん是は大に僕の謝する所である。謝する所であるから腹藏のない所を話して判斷をしてもらはう。

辭任の理由は多忙といふ事に歸着する。僕は一週間に三十時間近くの課業をもつて居る。是丈持たなければ米鹽の資に窮するのである而してそれ以外にも用事がある。讀書もしなければならぬ。だから多忙といふのは佯りのない所で尤な理由である。

次に僕は講師である。講師といふのはどんなものか知らないが僕はまあ御客分と認定する。大學から普通の教授以上叮重に取扱はれてもよいと考へて居る。大學の方ではさうは思はんかも知れんが僕の方ではさう解釋してゐる。從つて擔任させた仕事以外には可成面倒をかけぬのが禮で

ある。

其代り講師には教授抔の樣な權力がない自分の教へる事以外の事に口は出せない。夫等は皆教授會で勝手にきめて居る。語學試驗の規則だつても講師たる僕は一向あづかり知らん。いつの間にかあんなものが出來上つて居るのである。

だからあんなものから生ずる面倒は之をきめた先生方と當局の講師が處理して行くのが至當である。自分たちが面倒な事を勝手に製造して置いて其勞力丈は關係のない御客分の講師にやれといふ理窟はない。

尤も相談づくならそれでもよい。〇〇〇〇は僕を以て報酬がないからやらんのだと教授會で報告したさうだ。其解釋は至當である。僕自身もさう考へて居る。僕の樣なものに手數（擔任以外の）をかけるには金錢か、敬禮か、依賴か、何等かの報酬が必要である。それがなくて單に……囑托相成候間右申し進候也といふ樣な命令なら僕だつて此多忙の際だから御免蒙るのはあたり前である。

もし僕の辭任に對して學長始め其他の教授が不穩當と認めるならばそれ等の人々は講師と云ふものゝ解釋に於て全然僕と考を異にして居るのだ。僕の考では講師を使ふには教授を使ふよりも遠慮しなくてはならん。見玉へ講師は教授會の事に就て何等の權利ももつて居らんではないか。俸給の點から云つても無給のさへあるではないか。講師は教授に比すれば斯の如く特權が與へられて居らんのであるからして、講師の方では擔任以外の事を命令的に押しつけられてヘイ々云ふ丈の義理がないぢやないか。

僕は僕の擔任する六時間の講義さへして居れば講師としての義務はそれ以外にはないものと信じてゐる。夫だからして文科大學宛で斷り狀を出した。もし文句がわるいと云ふなら是にも理由がある。文科大學から來たのだから個人に對する樣な愛嬌のある文句はかけないのである。文科大學御中としてはあれ丈の表面上の事しか言ひ得ないのである。

君は親切に色々心配してくれるし井上さんもさうだといふから一應僕の考を述べて英斷を仰く譯だ。でとにかく今回は御免蒙るよ。

此手紙は〇〇さんに見せても井上さんに見せても乃至は教授會で朗讀してくれてもさし差支ない。君も迷惑だらうが妙に引きかゝつたもんだから宜しく取計つて下さい。　以上

二月十五日

金之助

姉崎兄

一五

二月十五日　午後二時―三時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ（大）

又手紙をあげます

自分の作物に對して後悔するのは藝術的良心の鋭敏なので是程結構な事はない。此量見がなければ文學者になる資格はないと思ふ。

自分で自分の價値は容易に分るものではない。古來からちつとも文藝に志さなかつたものが急に筆を執つて立派な作を出した例は澤山ある。夫迄は自分の何物かゞ分らなかつたのである。小說とか何とか云ふものは必ず一足飛びに大作は出來るとは限つて居らん。突然うまいものをかくのは天分の充分に發揮されべき機が熟した時に限るので他の人は書きつゝも熟しつゝも進んで行くのである。

僕の樣なものが到底文學者の例にはならないが僕は君位の年輩のときには今君がかく三分一のものもかけなかつた。其思想は頗る淺薄なもので且つ狹隘極まるものであつた。僕が二十三四にかきかけた小說が十五六枚殘つて居た。よんで見ると馬鹿氣てまづいものだ。あまり恥かしいから先達て妻に命じて反古にして仕舞つた。

勿論今でも御覽の通りのものしか出來ぬが然し當時からくらべると餘程進步したものだ。夫だから僕は死ぬ迄進步する積りで居る。

夫から今日の事を申すと（例へば猫を一節かくと）此次にはもうかく事があるまいと思ふ然しいざとなると段々思想も浮んでくる先づ前回位なものは出來る。すべてやり遂げて見ないと自分の頭のなかにはどれ位のものがあるか自分にも分らないのである

君抔も死ぬ迄進步する積りでやればいゝではないか。作に對したら一生懸命に自分の有らん限りの力をつくしてやればいゝではないか。後悔は結構だが是は自己の藝術的良心に對しての話しで世間の批評家や何かに對して後悔する必要はあるまい。

君は自我の縮少を嘆じて居ると同時に君の手紙中には大に自我を立てゝ居る。君の手紙の如く我が立つて居ながら夫でも自から小さい〳〵と嘆息するのは必竟幾分かのウソが籠つて居る

コンフエションの文學は結構である。コンフエションの文學程人に敎へるものはない。夫で澤山だから立派なものを書けばよい。容れられない事はない君は未だ其方面に於て雄飛して見ないのである

君の文章には君位の年輩の人にしてはと思ふ樣な警句が所々ある。夫丈でも君は一種の寶石を有して居る。君の手紙を見ると言廻し方の中々うまい所がある。他人が後悔せぬ所を恨む邊はうまくかきこなしたものだ。君の手紙のうちには形容の妙な言語もある。ドブ鼠の樣に音もたてずに凍りついて死にたい抔は振つたものだ。

君の批評を見ると普通の雜誌記者抔よりも遙かに見識か見える。よくよんで居る。だから自分

の作物上にでも其見識は應用され得るに相違ない。

僕は君に於て以上の長所を認めて居る。何故に萎縮するのである。今日大なる作物が出來んのは生涯出來んといふ意味にはならない。たとひ立派なものが出來たつて世間が受けるか受けないかそんな事はだれだつて受け合はれやしない。只やる丈けやる分の事である。

衣食は無論窮する事位覺悟しなければならない。そんなに贅澤をして見たり名文をかいて見たりしては冥利がわるい。

此夏は君は卒業する。卒業すればパンの爲に苦しむ。當前である。それがいやなら、すぐに中學校の口をさがして田舍へ行けばよい。

僕の旋毛は直き事砥の如し。世の中が曲つて居るのである。猫は苦しいのを強いて笑つてる許ぢやない。ほんとに笑つてるのである。

此手紙に對して別段返事はいらない。只奮つて强勉し玉へ　以上

二月十五日

森田兄

金之助

一六

二月十七日　午後四時―五時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
小石川區指ヶ谷町七十八番地姉崎正治氏へ（二）

拜啓

君の返事は拜見した。個人としての御忠告は難有感謝する。決して惡意を以て見る樣な事はしない。たとひ指圖であつても決して怒りはせん。

然し學長からもう一返何とか云つてきた時に何と挨拶するかはあらかじめ君に受合ふ譯に行かん、のみならず僕自身にも分らない。時と場合によつては斷然斷はらんとも限らない。是は決して君の親切を無にする考からではないから誤解してくれては困る。

高等學校の入學試驗が毎年ある。其折には學校長がよく僕の宅へ依賴にくる事がある。然し僕は多忙の故で毎々辭する事がある。それでそれぎりになる。淡泊なものだ。世の中は夫で澤山である。

夫では惡るいと云ふのは形式に拘泥した澆季の風習だ。二十世紀は澆季だから仕樣がないが俗吏社會、無學社會ならとにかく學者の御そろひの大學でそんな事をむづかしく云ふのは大學が御屋敷風御大名風御役人風になつてるからだよ。

大學で語學試驗を囑托する、僕が多忙だから斷はる。其間に何等の文句は入らない。もしそれが僕の一身上の不利益になつたり英文科の不利益になれば僕のわるいのぢやない。大學がわるいのだ。

語學試驗なんか多忙で困つてる僕なんか引きずり出さなくつたつて手のあいて居る教授で充分間に合ふのだ。

僕なんかは多忙のうちに少しでもひまがあれば書物を一頁でも讀む方が自分の爲にも英文學科の將來の爲にもなると思つて居る。語學試驗を引き受けないでけしからんと思ふなら隨意に思ふがよい。○○さんなんか何と思つたつて困りやしない。少々こんな謝絶に逢ふ方が人間といふものが理解されていゝのだ。學長たるものは只歴史の大家になつたつて駄目だよ。少しは世の中の人間はこんな妙な奴が居つて講師でもそんなに意の如くにはならないといふ事を承知させるがいいのだよ。　頓首

二月十七日

姉崎兄

金之助

一七

二月十九日　午後十一時—十二時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
下谷區中根岸町三十一番地中村弁太郎氏へ（三）

拜啓カーライルの家の寫眞は持ち合せずカーライルの家に關する案内記樣のものは別封にて入御覽候御參考にも相成候はゞ幸と存候夫から今度の插繪の事も小生から御願に參上可仕筈の處多忙の爲め本屋まかせに致置候甚だ無申譯次第御容赦可被下候

次に插繪は別段の望無之只繪として面白きもの價値あるものを御無理にも願度と存候

服部申候には御報酬としては普通の例にならふ必要なしと。去れば御手間のかゝり具合と出來のよさ加減にて充分御請求願上候

いづれ拜顔の上〔一字不明〕御禮可申上候へども以序右迄申上候　艸々

二月二十日

不折老臺

座下

金之助

一八

二月二十日　午後十一時—十二時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
本郷區本郷六丁目二十五番地藪中方野村傳四へ（三七）

拜啓君の苦心の作を四方太が失敗だと申し小山内が傑作だと申したので君大に惑ふのは尤もだ。然し四方太と小山内と反對の批評をするのは寧ろ當然で驚ろく事はない。小山内のかいたものを四方太に見せ四方太のものを小山内へ持つて行つたら兩方で是はだめだといふに違ない。僕はどうかといふと自分でも分らない。然しとにかく見せ玉へ公平なる評番（原）を仕るから。尤も世の中は色々なものでほめてくれても銘々ほめ所が違つたりわるく云つても悪くいふ場所が皆異なつて居る。どんなものでもほめられもするし、くさゝれもする。どんな男でも女を口説いてる内は生涯に女房の一人や二人（原）やもてるものだからな。天下の別嬪だつて難くせをつければいくらでもあるよ。とにかく苦心の御作とあるからは是非拜見仕らうから郵便で送り玉へ　以上

二月二十一（原）日

傳四先生

金

四方太は倫敦塔幻影の盾は面白いといふが薤露行はわからぬといふ人だ。僕には其理由がわからん

一九

二月二十二日　午前七時—八時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
本郷區本郷六丁目二十五番地藪中方野村傳四へ（三八）

只今一昔を拜讀に及んだから愈斷案を下さねばならぬ
四方太と撫子先生の評を左右にならべてどつちに賛成するかと問はれゝば余は四方太に賛成する。
然し君の作のうちで尤も失敗の作かといふとさうではない。君は尤も苦心の作だといふけれども僕が見れば他の出來のいゝ諸篇より同等より少し下位の程度のものだ。
だから四方太に賛成する爲には失敗といふ意味を大に高くしなければならん。
小山内君がほめるわけは分つた。あの男はこんなものがすきなんだ。あれは趣味が近いからほめるのだよ。
以上謹んで僕の斷案を左右に呈す。此斷案は決して動かぬ斷案であります。君決して疑ふなか

れ

今楷火といふのをついでによんだ。楷火も芝居がゝりだが、一昔よりはよつぽどいゝと思ふ　再拜

二十一日

傳四様

金之助

二〇

三月二日（時間不明）本郷區駒込千駄木町五十七番地より
本郷區臺町二十八番地北辰館川本（當時横前）敏亮氏へ

拜啓蕪稿薤露行御愛讀被下候よし感銘の至に不堪候御尋ねの文句「うれしきものに罪を思へば罪ながかれと祈る憂身ぞ」と申す句は下の様な意味で使用せる積に候「恐ろしき罪は犯したれど其内に嬉しき節もあれば其嬉しさに引かされて永く此罪を犯して居りたしと迄戀に心を奪はれたるうき吾身なり」と云ふ考にて使用致候處生硬なる爲め御疑をまねき候。元來小生のかきたるあるものはよく人より難解と云はれ候自からかく折は俳句抔作る折の考にて文章をやり候故此位なら通るだらうと考候へども俳句をよむ様な心得にて小説をよむ人は滅多になき爲め六づかしくて分らぬと思ふ人が多きならんと存候。骨を折つて人にわからぬ様に致すは一方から云へば愚な事に候。呵々

先は右御返事迄　草々頓首

三月二日

金之助

横前様

題は古樂府中にある名の由に候御承知の通り「人生は薤上の露の如く晞き易し」と申す語より來り候。無論音にてカイロとよむ積に候

自己の作物が讀者に快感を與ふるよりうれしき事は候はず。作物の目的は是に於て完く成就されたるものに候。重ねて大兄の厚志を謝し候。向後共御氣付の個處も候はゞ善惡にかゝはらず御注意願度と存候

二一

三月二日　午後零時―一時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
下谷區谷中根岸町三十一番地中村鉾太郎氏へ（四）

拜啓昨夜服部書店主人大兄の插畫持參逐一拜見致候。いづれも見事なる出來滿足不過之と存候あれは今迄のさし畫に類なき精巧のものにて出來の上は定めし人目を驚かすならんと嬉しく存候。夜中にてよくわからざりしかど、かの倫敦塔の圖の如きは着色の點に於いて慥かに當今の畫家をあつと云はしむるにたる名品と存候。小生日本人のかいた水彩にてあの如きしぶき設色を見ず。只うまく板に出來ればよいがとそれが心配に候。此邊は大兄よりきびしく服部へ御命じ願上候

其他薤露行の古雅にして多少の俳趣味を帶べる琴のそら音の幽冥にして迭宕なる。まぼろしの盾の無邪氣にして眞摯なる皆面白く拜見仕候御蔭を以て拙文多大の光彩を添へ單行して江湖に問ふの價値を加へ候。先は御禮迄　匆々

三月二日

不折畫伯

座右

金

三月二日　午後零時―一時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
下谷區谷中清水町五番地橋口清氏へ（五）

先日は失禮昨夜服部主人來訪さし畫すべて拜見致候。御骨折の段奉鳴謝候。あの樣な手のこんだものをかいて頂くのは洵に難有仕合に御座候。御蔭にて拙文も光彩を放ち威張つて天下を横行するに足ると存候。不折のも今迄に比類なき精巧のもの甚だ滿足致候。小生あの倫敦塔の色彩を非常にうつくしく感じ候。何だか西洋人の色としか思はれず候。

小生の尤も面白しと思ふは大兄と不折の畫が毫も趣味に於て重複せざる點に有之候。是一つは兩君の性質が違ふからかとも存候。兩君の畫によつて小生の文集もえらい者に相成申候

先は御禮迄　匆々

三月二日

橋口様

金

二三

三月三日　午後十一時—十二時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
本郷區本郷六丁目二十五番地藪中方野村傳四へ（三九）〔はがき　署名に「なつめの金公」とあり〕

早稲田文學の三號の小說評（先刻は失禮アレカラスグ讀ンダ）
小川未明氏作　未明君獨り感慨を催して居る讀者は何ともない。あんなに感じを人に强いるものおやない
大塚楠緒子作　筆が器用に出來て居る。苦(剛)る文章を考へたものであります。思ひつきもわるくありません。あの人の作としては上乘であります。三小說のうちの傑作である。
小栗風葉作　何をかいたものもの(原)やら。あれよりホトヽギスの投書の寫生文をよむ方よろしくと存候。駄作の駄の字であります

〔左上の隅に細字にて〕
僕の薤露行を十二ヘン讀んだ人がある。僕は感謝の手紙ヲ出シタヨ

二四

三月八日　午前七時—八時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
小石川區原町十二番地寺田寅彦へ（二）〔はがき〕

御病氣の由如何毎日いやな天氣風か雨か雪　いやはや。小生不相變原稿にて多忙是もいやはやあまりたのまれるのもよしあしゝでげす

二五

三月十七日　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
本郷區駒込西片町十番地反省社内瀧田哲太郎氏へ（一）

御手紙拜見中央公論には可成かゝうと思ふが何とも受け合はれない。只今ホトヽギスの分を三十枚餘認めた所。何だか長くなりさうで弱はり候。夫に腹案も思ふ樣に調はず閉口の體に候。實を申すと今日抔はぶら〳〵白帆の見える川べりでもあるきたい所に候。文章も職業になるとあまり難有からず又職業になる位でないと張合がなし厄介なものに候。漾虛集は未だ校正が廻つてこず。拜借の天外先生の文章も拜見のひまなく候

先は右御返事迄　草々

三月十七日

夏目金之助

滝田哲太郎様

二六

三月二十三日　午後四時―五時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ（一三）

拝啓新作小説存外長いものになり、事件が段々發展只今百〇九枚の所です。もう山を二つ三つかけば千秋樂になります。趣味の遺傳で時間がなくて急ぎすぎたから今度はゆる〳〵やる積です。もしうまく自然に大尾に至れば名作然らずんば失敗こゝが肝心の急所ですからしばらく待つて頂戴出來次第電話をかけます。松山だか何だか分らない言葉が多いので閉口、どうぞ一讀の上御修正を願たいものですが御ひまはないでせうか　艸々

金

虚子先生

二七

四月一日　午前十一時―十二時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ（一四）

拝啓雑誌五十二錢とは驚ろいた。今迄雑誌で五十二錢のはありませんね。夫で五千五百部賣れたら日本の經濟も大分進歩したものと見て是から續々五十二錢を出したらよからうと思ひます。其代りうれなかつたら是にこりて定價を御下げなさい。中央公論は六千刷つたさうだ。ほとゝぎすの五千五百は少ないといふて居ました。來月もかけとは恐れ入りましたね。さうは命がつゞかない。來月は君の獨舞臺で目ざましい奴を出し給へ。

雑誌がおくれるのはどう考へても氣になる三十一日の晩位に四方へ廻して一日から賣りたかつたですな。

校正は御骨が折れましたらう多謝々々其上傑作なら申し分はない位の多謝に候。

中央公論抔は秀英舍へつめ切りで校正して居ます。君はそんなに勉强はしないのでせう。雑誌を五十二錢にうる位の決心があるなら編輯者（原）も五十二錢がたの意氣込がないと世間に濟みませんよ。いや是は失敬。

僕試驗しらべで多忙しかも來客頻繁。どうか春晴に乘じて一日川があつて帆懸舟の通る所へ行つて遊びたい。夫から東京座の二十四孝といふものが見たい。

今月は新聲でも新潮でも手廻しがいゝみんな三月中に送つて來た。是を見てもホトヽギスは安閑として居てはいけない。然し夫は漱石の原稿がおくれたからだと在つては仕方がない恐縮。

島村の破戒と云ふ小說をかつて來ました。今三分一程よみかけた。風變りで文句抔を飾つて居ない所と眞面目で脂粉の氣がない所が氣に入りました。

何やら蚊やら　以上

四月一日

虛　先　生

金

二八

四月一日　午後五時—六時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より

本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ（七）

藝苑毎度御贈にあづかり奉謝候小生は君の作が出るか出るかと思ふて待つて居るが出ない今度もかゝなかつたですか。破戒は二三日前買ひました。先日紅綠が來て破戒の著者は此著述をやる爲めに裏店へ這入つて二年とか三年とか苦心したと聞いて急に島崎先生に對し「て」も是非一部買はねばならぬ氣になりすぐ買つて來ました。是は只買つて來たのです。面白くてもつまらなくても構はない買つて來たのです。夫から半分程よみました。第一氣に入つたのは文章であります。普通の小說家の樣に人工的な餘計な細工がない。そして眞面目にすら〳〵、すた〳〵書いてある所が頗るよろしい。所謂大家の文辭の樣に裝飾澤山でないから愉快だ。夫から氣に入つたのは事柄が眞面目で、人生と云ふものに觸れて居ていたづらな脂粉の氣がない。單に通人や遊蕩兒や所謂文士がかき下すものと大に趣を異にして居るからです。まだ後半はよまないから批評は出來ないが恐らく傑作でせう。今迄の日本の小說界にこんな種類のものはなからうと思ふのです。只一篇のモーチーヴが少々弱いかと思ふ。

輕薄なものばかり讀んで小說だと思つて居る社會にこんな眞面目なのが出現するのは甚だうれしい事と思ふ。

僕多忙採點に窮し來客に窮し。色々なものに窮す。君は金に窮する由。もし必要なら少々取りに來給へ　以上

四月一日

金

森田兄

僕ホトヽギスに坊ちやんなるものをかく。どうか御序の節よんで下さい。然し到底君がほめてくれさうなものでないから困る。實は藤村先生とは正反對のものです。

二九

四月三日 午後零時―一時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ（八）〔はがき〕

破戒讀了。明治の小説として後世に傳ふべき名篇也。金色夜叉の如きは二三十年の後は忘れられて然るべきものなり。破戒は然らず。僕多く小説を讀まず。然し明治の代に小説らしき小説が出たとすれば破戒ならんと思ふ。君四月の藝苑に於て大に藤村先生を紹介すべし

三〇

四月四日 午後零時―一時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
本郷區駒込曙町十一番地大谷正信氏へ（三）

春暖の候愈御清適奉賀候小生も一寸伺ひ度と存じながらつい色々な雜用にて御無沙汰致し居候
拙文御推賞にあづかり感謝の至に不堪候山嵐の如きは中學のみならず高等學校にも大學にも居らぬ事と存候然しノダの如きは累々然としてコロがり居候。小生も中學にて此類型を二三目擊致候。サスが高等學校には是程劇しき奴は無之（尤も同類は澤山有之）候。要するに高等學校は校長抔に無暗にとり入る必要なき故と存候。山嵐や坊ちやんの如きものが居らぬのは、人間として存在せざるにあらず、居れば免職になるから居らぬ譯に候。貴意如何。
僕は教育者として適任と見做さるゝ狸や赤シヤツよりも不適任なる山嵐や坊つちやんを愛し候。大兄も御同感と存候。右御禮かた〳〵卑見迄如斯に候　以上

四月四日

繞石兄

金

三一

四月四日 午後零時―一時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より

麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ（一五）〔はがき〕

畑打ち淡々として一種の面白味あり。人は何だこんなものと通り過ぎるかも知れず。僕は笹の雪流な味を愛す。只學士の妻になり損なつたものが百姓になつて畠を打つ程零落するのは普通でない。「小説家」といふ文はわる達者である。「寮生活」も多少輕薄也。而も兩篇とも僕の文に似て居るから慚愧の至りだ。これにくらぶれば「素人淨瑠璃」抔の方遙かに面白し。

藤村の破戒といふのを讀んで御覽なさい。あれは明治の小説として後世に傳ふるに足る傑作なり。金色夜叉抔の類にあらず。

五千五百部はうれましたか、五十二錢が高いと思つたら明星も五十二錢だ。隨分思ひ切つたのが居る。其代り明星はうれません。

四月四日

三二

四月十一日 午後二時—三時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より

芝區琴平町二番地朝陽館野間眞綱へ（三九）〔はがき〕

拜啓其後久々御目にかゝらず。承はれば島津の若さんは病氣の由皆川より少々よい方との報知ありたり。然し何かと御多忙ならん。小生も是から又多忙にとりかゝる。講義をかくのがいやでたまらない。左樣なら

〔以下細字にて行間に認めあり〕

度々御氣の毒の事なりよろしく御傳可被下候

三三

四月十一日 午後十一時—十二時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より

廣島市江波村築島内鈴木三重吉へ（八）

御手紙も小説も屆いて只今兩方とも拜見千鳥は傑作である。かう云ふ風にかいたものは普通の小説家に到底望めない。甚だ面白い。强いて難を云へば段落と順序が整然として居らん。第一回の藤さんと瀨川さんの會話が少々振はない。（其代りあとの會話は悉く活動して居る）。最後に舟を望んで藤さんを想像する所は少しくど過ぎる（其代り袂の貝をなげる所などはうまいものだ）。夫から法學士との問答もない方がいゝ。繪本の御姫さまは前後ともない方が明瞭である。尤もあれば妙な趣味は生ずる。壁の畫がね（原）け出すのも考へものだ　以上は僕の感じたわるい方だ

がそれを除いては悉くうまい。會話といひ所作といひ仕草といひ悉く結構である。一つ二つ取り出して云ふとほかゞまづい樣になるから云はない。總體が活動して居る。僕が島へ遊びに行つて何かかかうとしても到底こんなには書けまい。三重吉君萬歲だ。そこで千鳥を此次のホトヽギスへ出さうと思ふが多分御異存はないだらう。構ひますまいな。尤も緒言はぬく積りだ。

どうか面白いものをもつと澤山かいて屁鉾文士を驚ろかして吳れ玉へ。僕多忙でこまる。昨日から講義をかきかけたら半ページ出來た。講義を書くより千鳥をよむ方が面白い。加計の緣談は破談とやら氣の毒な事だ藤さんでも貰つてやり玉へ。血統なんて構やしないよ。別嬪でヴイオリンが上手ならわるい病氣なんか出やしない。大丈夫なものさ。先祖代々の血統を吟味したら日本中に確たる家柄は一軒もなくなる譯だ。序によろしく　以上

四月十一日夜

金

三重吉樣

三四

四月十一日　午後十一時—十二時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より

麴町區富士見町四丁目八番地高濱淸氏へ（一六）

拜啓僕名作を得たり之をホトヽギスへ獻上せんとす隨分ながいものなり作者は文科大學生鈴木三重吉君。只今休學鄕里廣島にあり。僕に見せる爲めに態々かいたものなり。僕の門下生からこんな面白いものをかく人が出るかと思ふと先生は顏色なし。先は御報知まで　艸々

四月十一日

金

虛子先生

座下

三五

四月十五日　午前十一時—十二時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より

廣島市江波村築島內鈴木三重吉へ（九）

拜啓二三日前君に手紙を出すと同時に虛子に手紙を出して名作が出來たと知らせてやつたら大將今日來て千鳥を朗讀した。そこで虛子大人の意見なるものを御參考の爲めに一寸申し上げる

○全篇を通じて會話が振つて居らん。藤さんのホヽヽが多過ぎる藤さんが田舍言葉で瀨川さん

が田舍言葉で掛合をしたらもつと活動するかも知れん（漱石曰く虛子の云ふ所一理あり。然し主人公が田舍言葉でやつつけたら下女や何かの田舍言葉が引き立つまい。但し全篇を通じて若い男女の會話はあまり上出來にあらずと思ふ）

○虛子曰く章坊の寫眞や電話は嶄新ならずもつと活動が欲しい（漱石曰く章坊の寫眞も電話も寫生的に面白く出來て居る）

○女と男が池の處へしやがんで對話する所未だ室に入らず。且つ其景色が陳腐なり（漱石曰く會話はあの位で上の部なるべし。池の景色鮒の動靜悉く寫生なり陳腐ならず）

○虛子曰く若い男女が相會して互に思ふはありふれた趣向なり但二日間の出來事と云ふに重きを置いて、それを讀者にわからせる樣につとめた所がよし。（漱石曰く趣向は陳腐にもあらず又陳腐でなき事もなし要するに技倆如何にて極る。此篇の大缺點はどうしても作り物であるといふ疑を起す點にあり。然し所々に寫生的の分子多きために不自然を一寸忘れさせるが手際なり）

虛子曰く狐の話面白し全篇あの調子で行けばえらいものなり（漱石曰く全篇大概はあの調子なり）

要するに虛子は寫生文としては寫生足らず、小說としては結構足らずと主張す。漱石は普通の小說家に是程寫生趣味を解したるものなしと主張す。

以上は虛子の評なり。君は固より僕に示す丈の積りだらうが僕以外の人の說も參考に聞く方が將來の作の上に利益があると思ふから一寸報知する。虛子と云ふ男は文章に熱心だからこんな事を云ふので僕が名作を得たと前觸が大き過ぎた爲め却つて缺點を擧げる樣になつたので、いゝ點は認めて居るのである。

それで原稿は一度君の許諾を得た上でと思つたが虛子が持つて歸ると云つたからやりましたよ。尤も長いから少々削るかも知れない。是も不平を云はずに我慢してくれ玉へ　以上

四月十四日夜　　金

三重吉　様

三六

四月十七日　午後十一時—十二時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
本郷區本郷六丁目二十五番地藪中方野村傳四へ（三〇）

拜啓先達て一寸御話を願つた末松先生の著述は愈本屋が著者と相談の上僕の撰定する人に依賴し度と云ふ事になつた。そこで先づファンタジー・オフ・ジャパンといふのから始めるさうで是を六月一杯に上梓したいと云ふ見込ださうだ。そこで先方の條件は

○第一、小說風にかいてあるからして、譯文に骨を折つてもらひたい。卽ち美文的に譯してもらひたい。

○原稿料は原書の一ページにつき壹圓五十錢拂ふ

○期限は六月十日迄。ページ數は二百四十八ページ

○譯者の名前は出さず。矢張り末松謙澄著とする事

以上の條件故誰か適任者で小使がとり度人はあるまいか。僕も引き受けた以上は幾分か責任が〔あ〕る。美文的に且間違のない樣に期限に仕上げてくれる人でないと困るが君もう一遍心當りを尋ねてくれないか。

尤も文體が揃へばあながち一人に限らず二人でも三人でもよし。

僕の希望は小遣の入る人で以上の資格に應ずる人がよからうと思ふ。

先は右相談旁ちよつと御周旋の勞を煩はし度と存候　以上

四月十七日

金

傳四兄

三七

四月十八日　午後六時—七時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より

本郷區本郷六丁目二十五番地藪中方野村傳四へ（四一）〔はがき〕

栗原と森田の兩氏が引きうけてくれゝば結構也。然し論文で靑くなつたり黃色くなつたりして居るものがそんな餘裕があるかね。僕は末松先生自身よりもうまい文章をかく人を周旋してやると威張つたから幾分か責任がある。二人でやれば文體も揃はなくてはならん。其邊も話してくれ玉へ

三八

四月十九日　午後十一時—十二時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より

下谷區谷中淸水町五番地橋口淸氏へ（六）

拜啓先日御面倒を願ひ候藏書箋の儀兩三日前學校にて本日に面會の上相渡し候處大悅びにて篤く禮を申し畫料はどの位なりやと申候故心配に及ばず無料にてよろしと申置候實は大兄に聞き合せたる上クラークに返事を致すが順なれど大兄は無論酬報をとらるゝ事なき事と存じ一存にて勝

手に答へ置き候先は右御禮かた〴〵御報迄　艸々

四月十九日　　金之助

橋口様

漾虚集はまだ出來ず本屋がむやみに校正を後らす故に候

三九

四月二十八日　午前七時—八時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ（一七）〔はがき〕

拜啓毎月清國南京へ送つて頂いたホトヽギスは今月から御やめにして下さい。大將事日本へ歸つて參ります。どうか日本の東京の番地へやつて頂戴。其番地は只今一寸忘れた。

四〇

四月三十日　使ひ持歸　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ（一八）

啓

一金　參拾八圓五拾錢也

一金　壹百四拾八圓也

計　壹百八拾六圓五拾錢也

右は吾輩は猫である(十)及び坊つちやんの原稿料として正に領掌仕候也

四月三十日　　夏目金之助㊞

俳書堂雜誌部

御中

四一

五月三日　午前八時—九時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
廣島市江波村築島内鈴木三重吉へ（一〇）〔はがき〕

寺田寅彦が千鳥をほめて好男子萬歳とかいて來た。四方太が手紙をよこして四方太抔は到底及ばない名文である傑作であると申して來た。僕も是で鼻が高い。あれにケチをつけた虚子は馬鹿と宣告してしまつた。　以上

四二

五月五日　午後四時—五時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ（九）

君の手紙は昨日拜見仕つた。實は此前二度手紙を出しても返事がないから君は當分手紙をかゝないのかと思つて居たら又突然手（長）い奴が來て少々驚ろいた。翻譯の事は實は僕に譯せといふから、末松著で下働きをするなら食ふものに困つた時でなくてはいやだ。然し末松さんより上手な文章家を周旋してくれといふなら敎へてやると威張つた結果とう〳〵君と栗原君の所へ持つ〔て〕行く事になつた。原稿料が高いつて本屋抔に嬉しい顔を見せてはいけない。壹圓五拾錢ではいやだが夏目からたのまれて仕方がないからやつてやると云ふ樣な顔付をして少々本屋を恐れ入らせてやるがいゝと思ふ。

猫の御批評難有頂戴。もう一回でやめる積で居ますが。忙がしくて書けないから閉口だ。所謂寫實の極致といふ奴をのべつに御覽に入れてアッと驚ろかせる積丈は成算が出來て居る。然し實際驚ろかすのはいつの事か分ない。

坊ちやんも讀んで下された由難有う。君の抗議には降參をしない。ほめてくれた所は贊成であります。大に嬉しいのです。

ホトゝギスの插繪の攻擊は降參をしてもよろしい。あれは僕のかくのでないから、時々は僕も惡口したくなる。然し君小杉先生の雲は特別ですよ。あれはたまらないものだ。

左千夫が昌子（原）を評したのを明星で「これほど本人の魯鈍を發表せるものなし」とか云ふて居る。左千夫が見たら怒るよ。元來左千夫なんて歌論抔出來る男ではない。只子規許り難有がつて自ら愚なうたを大事さうに作つて居る。

破戒の批評も拜見した。あの位思ひ切つてほめてやれば藤村先生も感謝していゝと思ふ。それでも過ぎたるは何とか云ふなら話せない男だ。詩人ぢやない僞人だ。實は破戒が出ても精細な評が出ないから氣の毒に思つて居たが君のを見ると同時に太陽のも早稻田文學のも讀賣には前後して三回も出たのを見た。かう續々出ればもう澤山だと思ふ。藤村先生瞑して可なり。

君のこんどの手紙はいつものよりも親しい感じがある。是はいつもよりも遠慮がないからだらう。

僕論文を見るので中々多忙「坊ちやん」をかく所にあらず。今日漸く古城先生を片付けた。凡

て十有九人。傳四の如きは御丁寧に二冊つゞきを呈出して居る。

先達てから食後に腹が痛くつて仕方がない。學生が夫は胃ガンだと嚇したので驚ろいて服藥を始めた。是は慢性胃カタールださうだ。腹が重くて、鈍痛で、脊や胸がひきつつて苦しくて生きてるのが退儀千萬になつた。近々人間を辭職して冥土へ轉居しやうと思ふ。

五月五日　　野武士

白楊先生

藝苑は君もくれるし、社からもくれる。可相成は君から丈貰ふ事にして本社の方は斷はりたい。

四三

五月七日　午後四時—五時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
本郷區本郷六丁目二十五番地藪中方野村傳四へ（四二）〔はがき〕

昨日は近火見舞難有候。あの時やけたら今日は學校を休む筈であつた。

胃カタールで藥を呑むと灰色の糞が出る。不可思議なものだ。ホトヽギスの千鳥を御覽、君より餘つ程うまいぜ。先生一番の奮勵を要す。君のエッセイは英語がまづいね。然し他に御仲間があるから大丈夫だ。然し今少し何とかありたいものだ。意味の通じない所がある。もつと注意して本をよまなくてはいけない

四四

五月七日　午後四時—五時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
芝區琴平町二番地朝陽館野間眞綱へ（四〇）〔はがき〕

昨日は近火の處早速御見舞難有候。實は中川、森兩君と寶亭へ行つて夫から九段へ行つて火事の事などは頓と知らず。一時は大分騷いださうだ。何でも知らずに居るのが一番結構だ。人間もいつ死ぬか知らないから毎日幅をきかして居るのだね。島津さんはどうかね。　艸々

四月某日

只今手紙着神經衰弱がわるい由。近々人間も辭職して靜養可然か呵々。今少し立つと漾虛集が出來るから一部上げます

四五

五月十六日　午前八時―九時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
廣島市猿樂町鈴木三重吉へ（一）〔はがき〕

拜啓寫眞は先日中川君から屆けてくれました。難有う。あの寫眞は大理石の像の樣には見えない。幽靈の樣だ。君の顏や咽喉の所があまりやせて居るせゐだらう。是も全く十七八の別嬪の祟と思ふ御用心

四六

五月十九日　午後十一時―十二時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ（一九）

虛子先生行春の感慨御同樣惜しきものに候。然る所小生卒業論文にて毎日ギュー〔／＼〕閱讀甚だ多忙隨つて初袷の好時節も若葉の初鰹のと申す贅澤も出來ず閉居の體。加之眼がわるく胃がわるく。散々な體服藥の御蔭にて昨今は腹の鈍痛丈は直り大に氣分快壯の方に候。いつか諸賢を會して惜春の宴でも張らんかと存候へども當分駄目。一寸伺ひますが碧梧桐君はもう東京へは來（原）らんですぐ行脚にとりかゝりますか

卒業論文をよんで居ると頭腦が論文的になつて仕舞には自分も何か英語で論文でも書いて見たくなります。決して猫や狸の事は考へられません。僕は何でも人の眞似がしたくなる男と見える。泥棒と三日居れば必ず泥棒になります　以上

五月十九日　金

虛子先生

四七

五月十九日　午後十一時―十二時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
伊勢國宇治山田町宇浦田町百五十番地湯淺廉孫へ

拜啓此春は伊勢迄行かうと思つて居た所例の如く色々の用事が出來て遂に違約と相成殘念千萬に候。此夏もどこへも出られぬかと思へば存分情なき生活なり。新聞の切りぬき御親切にわざわざ御送難有候拙文があんな所へ引き合に出やうとは夢にも思ひ寄らず。隨分妙な所で妙な人によまれるものに候。只今卒業論文閱讀中多忙一筆を走らす　失禮御免

五月十九日

湯淺　様

四八

五月十九日　午後（以下不明）　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
小石川區竹早町百二十番地愛知社内中川芳太郎へ（九）

拜啓　二三日前君の論文をよみたり。通篇自家の英語にてかきこなしてある御手際はえらいもの也。英文としてあれ丈にかき上げられゝば結構なり。感服の至りである。只僕の氣のついたうちに兩三箇所の誤謬あり。コンサーンといふ字の使用法が違つて居る樣に記憶す。內容も博引旁證少しも胡魔化しなく頗る立派なものなり。只西洋と日本の比較が有機的に發展してこず。御互に獨立して竝んで居る樣〔な〕傾向諸々あるは可惜。然し大體から云ふて大成功である。聊か數言を陳じて敬意を表す。今から十年もあの方面へ向つて進めば日本隨一の學者になれる忘たり玉ふなかれ。老頽余の如きは云ふに足らず新進の士正に鋭意斯道の爲に貢獻する所あるべし。○○君の論文も頗る面白い。只英語がづぬけてまづいのは困る。

御願の文學論はいそぐ必要なし。面倒なればやめてもよし。僕は是非出版したい希望もない。

金

通讀の際變な事あらば御注意を乞ふ

エッセイは未だ片づかず

五月十九日

芳太郎　様

四九

五月十九日　午後十一時—十二時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ（一〇）

拜啓君の論文は大に短かい而してよく釣合がとれてよく纏つて居るあれはマーローの脚本が數に於て少ないのと其數の少ない脚本が三とも同種類の主人公で貫いて居る所爲か又は君の手際がうまいのか。

文章も君のかいたのと人のを借りたのとは區別出來る樣に思ふが君のかいたと思はれる所が中中面白く出來て居る。但し綴字の間違に亂暴なのがあるのは驚ろいた。第一君の參考書のシモンズ Symonz とかくのは餘程輕卒だ夫から時々 deliuarate と云ふ言葉があるが是も困る。其他は略。然し大體の上に於て成功で結構であります。

金

五月十九日

森田君

五六日中に僕の短篇をあつめたものが出來る。本屋に贅澤を云ふて居たら。出來上つた上が本屋が復讐に大變高いものにしてどうしても是より安くは賣れないといふには閉口した

毎度雜誌を頂戴するから御禮の爲め一部獻上したいと思ふ

論文は未だ閲了の運に至らず

金

五〇

五月十九日 午後十一時—十二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より
本郷區本郷六丁目二十五番地藪中方野村傳四へ（四三）

拜啓二宮君の所へ手紙をやりたいが番地が不分明故君に傳言を依賴する。

昨今兩日二宮君の論文をよみたり。泰西の脚本を數多く通讀して材料を種々の方面から蒐集した勞力は大したものにて感心の至である。其議論も西洋人抔のいふ事には耳をも貸さず直ちに自己の胸臆を大膽に述べたる所甚だ可なり。但し英文の拙劣にして而も書法のゾンザイなる事甚し。同氏は無論英文をかく了見もあるまいが、あまり亂暴である故折角の論文の價値を下げる事一方ならず

面白い事は中川氏の云ふて居る事と二宮氏の說とある箇所が符節を合する樣に暗合した。

五月十九日

金

傳四樣

五一

五月二十一日 午後三時—四時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より
麴町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ（二〇）

のせぬ時は御保存を乞ふ

拜啓別紙の如き妙なものが參り候筆者は木村秀雄とて熊本に住む人なれど逢ふた事も話をした事もなければ學生やら紳士やら知らず

只今論文校閲中にて熟讀のひまも無之只御高覽の爲めに御廻し致候。ホトヽギスへのせるとも

よすとも其邊は勿論御隨意に候　以上

五月二十一日

金

虛子先生

五二

五月二十六日　午後三時—四時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
廣島市猿樂町鈴木三重吉へ（一二）

拜啓漾虛集が出來ました一部あげます。諸々方々に誤字があり誤植がある樣だから見當つたら教へて頂戴

人間の價値は何かやつて見ないとどの位あるか分らない。君どうぞ勉强してやつてくれ玉へ。然し世の中には駄目な事が分り切つて居ても眼が見えないのでうん〳〵やつてる奴がある。そんなものは教へてやつても說諭してやつても分りつこない。矢張自分が斃れる迄やつて念晴らしが出來ないと氣が濟まんものである。勝手に覺りがつく迄やらせるがいゝが、はたから見ると憫然なものだ。是は此間中からたつた一人で感じて居る事だが誰にも云はない。然し文藝上の事でも何でもない。

君にやり玉へといふのは文學の事だ自分で何か作つて見ないとどの位作れるものか自身にもわからない。いくら作つてもそのつぎの自分はどんな風にあらはれるか決して分るものでないから君も千鳥のあとに萬鳥でも億鳥でも大にかき給はん事を希望する。

僕も漾虛集丈でつきた譯でもないから是から又何ぞかく積りで居る。　以上

五月二十六日

夏目金之助

鈴木三重吉君

先日來卒業論文を漸く讀み了つた。中川のが一番えらい。あの人は勉强すると今に大學の教師として僕抔よりも遙かに適任者になる。しかも生意氣な所が毫もない。まことにゆかしい人である。只氣が弱いのが弱點である。

五三

五月二十九日　午後十一時—十二時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より

麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ（二）

若葉の候も大分深く相成候小生フラヲルの單衣を着て得々欣々として而も服藥を二種使用致し居候千鳥の原稿料御仰せの通にて可然かと存候

柳絮行はつまらぬ由、小生もゆつくりと拜見する勇氣今は無之候

漾虛集本屋より既に獻上仕り候や一寸伺ひ候。まだならば早速上げる事に取計はせます　以上

五月二十九日　　金

虛子先生

五四

五月三十日　午後三時—四時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
下谷區谷中清水町五番地橋口清氏へ（七）

拜啓御蔭にて漾虛集も出來ありがたく御禮申上候

偖先日願ひ候ブックプレートの依賴者ある美術的に寫したる寫眞を見せるから來いと申す故次の日曜日朝參る積に候。もし御同意なら御同行如何本人は君にも見せたしと申居候。此男の說によると日本の寫眞術はまるで駄目のよし。此男は美術がすきでそんなものを調べる爲め半分來朝丸で日本的の生活を送り居候　御舍兄にも御ひまなら御同行を御勸め申度候。先方の都合は八時半から十二時迄のうちならいつでもよき由〔に〕候八時頃拙宅迄御出被下候へば幸甚　所は巢鴨に候。先は右用事まで　艸々頓首

五月三十日　　夏目金之助

橋口清樣

五五

六月三日　午後三時—四時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ（三）

拜啓小生近來論文のみを讀んだ結果頭腦が論文的に相成猫などは到底かけさうに無之候へども若し出來るならば七月分に間に合せ度と存候然し是は當人があてにならぬ事故君の方では猶あてにならぬ事と御承知被下度候

薄暑の候南軒の障子を開いて偶然庭前を眺めて居るのは愉快に候。少々眼がわるくて弱はり候。

碧梧桐趣味の遺傳を評して冗長魯鈍とか何とか申され候魯鈍には少々應へ申候。大將はいつ頃出發致候やあれは二年間日本中を巡廻する經畫の由なれど屹度中途でいやになり候。もしやりとげればそれこそ冗長魯鈍に候。

近來一向に御意得ずたま〳〵机上清閑毛穎子を弄するに堪へたり因つて數言をつらねて寸楮を置二階に呈す　艸々

六月吉日

金

虛子先生

五六

六月三日　午後三時—四時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
小石川區同心町二十八番地森卷吉へ　(二)

拜啓文章世界御送難有候あれは桑木君から僕の事が書いてあると聞いて先日買つて見たものです

僕の小兒の時分は楠正成論とか漢高祖論とかいふのが流行つたものだが今どきの小供は妙な事をかく驚ろいた天下は廣いものだ夏目漱石論を草する中學生があらうとは思はなかつた。

白鳥先生のつとめてやまずんば云々は老先生から奬勵の辭を頂戴した樣な感がある實際先方では其つもりなのだらう

近來論文ばかり讀んだので頭腦が丸で論文的になつた此樣子では創作抔は出來さうにない然し何も書きかけて居ないと氣樂でいゝ日々是好日といふ語が思ひ合される

此夏は又講義をかゝなければならない苦しくて面白くなくてきく人もつまらなくて然もやらねばならぬとは馬鹿氣て居る

右御禮旁二三迄　艸々頓首

六月二日

森仁兄大人

金

君が西片町へ轉居するといふ話をきいたが事實ですか

六月五日　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
下谷區中根岸町三十一番地中村鉾太郎氏へ（五）

拜啓漾虛集御蔭を以て奇麗に出來上り難有候
却說小生友人にてモリスと申す米國人只今第一高等學校の教師に候處日本の美術書畫に多大の興味を有し諸々方々へ出掛候事樂の樣に見受られ候故一度大兄方へまかり出て御所藏の畫幅ことに日本のもの又は支那物拜見の上種々斯道の御話も承はり度と存候が御都合は如何に候やもし御迷惑に無之候はゞ適當の日（日曜ならねば午後）御指定被下間敷や尤も此男は非常のバンカラで萬事日本流に振舞ひ居候へば接待等の點については寸毫の御懸念無之候先は右御都合御うかゞひ迄　艸々不一

六月五日

不折居士　案下

金之助

五八

六月七日　（以下不明）　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
廣島市猿樂町鈴木三重吉へ（一三）

昨夜君の所へ手紙をかいた處今朝君のを受けとつたから書き直す原稿料は遠慮なく御受取可然。小生抔は始めからあてにして原稿をかきます
漾虛集の誤字誤植御親切に御教示を蒙り難有候。實は僕も訂正の積で一度よんで誤の多いので驚ろいた位人が見たら定めし見苦しき事なるべし御蔭にて僕の見落したる分を大分直す事が出來て結構だ。どうか序にあとも教へて下さい
君は九月上京の事と思ふ神經衰弱は全快の事なるべく結構に候然し現下の如き愚なる間違つた世の中には正しき人でありさへすれば必ず神經衰弱になる事と存候。是から人に逢ふ度に君は神經衰弱かときいて然りと答へたら普通の德義心ある人間と定める事に致さうと思つてゐる
今の世に神經衰弱に罹らぬ奴は金持ちの魯鈍ものか、無教育の無良心の徒か左らずば、二十世紀の輕薄に滿足するひやうろく玉に候。
もし死ぬならば神經衰弱で死んだら名譽だらうと思ふ。時があつたら神經衰弱論を草して天下の犬どもに犬である事を自覺させてやりたいと思ふ。
大分あつたなつた。拙宅疊替なり。書齋をかへる時は大騷ぎ中川先生と今一人を手傳にたのみたいと思ふ　艸々不一

六月六日

三重吉様

金

五九

六月七日 午後四時―五時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
本郷區本郷六丁目二十五番地藪中方野村傳四へ（四四）〔はがき　全部六朝風の文字にて認めあり〕

啓上來る九日頃愈書齋の疊替を仕るにつき手傳に御出掛願候右用事迄　早々頓首

六〇

六月八日 午後零時―一時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
神田區三崎町三丁目一番地前田儀作氏へ（三）

拜復漾虛集一部進呈仕候處わざ〳〵御禮にて痛入候實は毎度白百合を頂戴仕り候につき聊か御禮のしるし迄に机下に呈し候までの處御通覽被下候よしにて此上なき仕合に候。然る處校正疎漏にて到る處に誤字誤植有之嘸かし御目ざはりの事と存候

破戒は小生も數日かゝりて通讀致候あれは文章にてよませる小説では無之又局部々々の活動にて面白がらせる小説にも無之辛抱して仕舞迄よませて後感心させる作と存候小生も一いきにはよみかねぬ候へども通讀して感服致候。愚考にてはあれは慥かに明治の作物として後世に傳ふべきものと存候尤も局部々々の刺激を求むる人にはよみ通す事少々如何あらんかと存候

拙作につき御褒辭を賜はり難有奉謝候去れど拙作中には破戒程の大作は無之尤も趣の違ふもののみ故此方が大兄の嗜好に投じて却つて分外の仕合せと相成りたるやも計りがたくと存候呵々先は右御挨拶迄　草々不一

六月七日夜

金之助

林外詞兄

六一

六月十九日 午後六時―七時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
廣島市猿樂町鈴木三重吉へ（一四）〔はがき〕

漾虛集の誤植御報知難有候三版には大分正さねばならぬ。

神經衰弱論をかゝうと思つて居る。僕の結論によると英國人が神經衰弱で第一番に滅亡すると云ふのだが名論だらう。いづれ出たら讀んでくれ玉へ

六二

六月二十三日 午後十一時—十二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より

〔本郷區本郷六丁目二十五番地藪中方野村傳四へ（四五）〔はがき〕

正は勝たざるべからず、邪は斃れざるべからず。犬は殺さゞるべからず。豚は屠らざるべからず、猪子才は頓首せしめざる可からず。文は作らざるべからず。書は讀まざるべからず。月給は貰はざるべからず。御馳走は食はざるべからず。試驗はしらべざる可からず。人世多事

六三

六月二十三日 午後十一時—十二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より

本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ（二）

拜啓末松の譯完結の由本屋よりも其旨申來候原稿料も御受取のよし承知致候末松先生外題を改めて夏の夢日本の面影としたさうだ。何だか本郷座でやりさうぢやないか。青萍先生も存外話せない男だ

論語を御よみの由小生は丸で忘れたりニーチエと論語とを比較して見給へ。兩人共人間である。口述試驗に慘憺（原）たるものは君のみにあらず。學問の出來る中川と平然たる傳四とを外にしては大概は慘澹たるものである。サンタン豈君のみならんや。試驗官たる小生が受驗者とならば矢張りサンタンたるのみ。僕はあの試驗をして深く感じた事がある。多數の人は逆境に立てば皆サンタンたるものだ。得意の境に立てば愚うたらたる小生の如きものも亦普通の試驗官たり。人間を見るのは逆境に於てするに限る。得意に居る奴を見ると大に買ひ被る。當人自身が買ひ被つて居る。氣の毒なものである。逆境を踏んだ人は自ら修業が出來るサンタンたる諸先生も毎日試驗を受けて居れば立派な人になれる。天の禍を下す、下せる人を珠玉にせんが爲めなり。禍はないかな。禍はないかな。天下に求むべきものありとすれば禍のバーゲトリなり。

今一つ感じた事がある。純文學の學生は大抵神經衰弱に罹つて居る。是は二十世紀の潮流が自然學生を驅つてこゝに至らしめたるか又は神經衰弱ならざれば純文學が專問（原）に出來ぬのか。未だ研究せず。諸君既に神經衰弱なれば試驗官たる拙者の如きは大神經衰弱者ならざるべからず而も當人自身は現に神經衰弱を以て自任しつゝあり。神經衰弱なるかな。神經衰弱會を組織して大に

文運を鼓吹せんとす白楊先生以て如何となす。　頓首

六月二十三日

白楊先生

金

六四

六月二十六日　午後十一時—十二時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ（一三）

拜啓本日は御來訪の處不在にて失禮致候其節は存じも寄らぬものを山妻へ御惠投被下難有候是は定めて翻譯周旋の御禮と存候があの位な事で御禮は入らぬ事に候小生はあの事件の爲めに時間も頭腦も使つて居らぬ上に友人の爲めにか程の勞をとるは小生の地位として當然の事と存候もし氣が濟まねば鹽煎餅の一袋でも頂けばよかつた君方に十圓と申す金は卒業後の今日大變な價値ある金に候小生に在つては（山妻に在つてはどうだか知らず）左程大金ならず。もらつて文句を竝べては濟まないが事實は右の通りである。他人への義理ならばとく別三年間顔を見合せたる小生に對しては入らぬ御心配に候。

尤も僕の妻は慾張りなれば定めて嬉しい事と存候。妻の考では君方は既に卒業したのだから大變な金持になつたのだらう位に考へて居るならんと存候。

先は右御禮旁小言迄一言申入候。いづれ其うち拜眉萬縷可申述候。卒業後の經營は口述試驗よりも數倍慘怛たるものに有之べく候へば御用心の上しつかり御やり可被成候　以上

六月二十六日

夏目金之助

森田米松様

栗原元吉様

六五

七月三日　午後二時—三時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ（一三）

啓上其後御無沙汰小生漸く點數しらべ結了のう〳〵致し候。昨日ホトヽギスを拜見したる處今度の號には猫のつゞきを依頼したくと存候とかあり候。思はず微笑を催したる次第に候。實は論文的のあたまを回復せんため此頃は小說をよみ始めました。スルと奇體なものにて十分に三十秒

位づゝ何だか漫然と感興が湧いて參り候。只漫然と湧くのだからどうせまとまらない。然し十分に三十秒位だから澤山なものに候。此漫然たるものを一々引きのばして長いものに出來かす時日と根氣があれば日本一の大文豪に候。此うちにて物になるのは百に一つ位に候。草花の種でも千萬粒のうち一つ位が生育するものに候。然しとにかく妙な氣分になり候。小生は之を稱して人工的インスピレーションとなづけ候。小生如きものは天來ノインスピレーションは棚の御牡丹と同じ事で當にならないから人巧的ニインスピレーションを製造するのであります。近頃は器械で卵をかへすインキユベトーと云ふものがあります。文明の今日だから人爲的インスピレーションのあるのも尤でせう。そこで此七月には何でも四篇ばかりかく積りです。前に云ふ漫然たる惠比壽ぎれの樣なものは雲の如くあるが偖まとまつたものは一つもない。どれを纏めやうか、又どう纏めやうか其邊は未だ自分でも考へて居ないのであります。實は來學年の講義を作らなければ大雄篇をかくか大讀書をやる積りだが講義といふ奴は一と苦勞です。是は八月に入つてからかき出す積りです。

傳四は文學士になり候。小生も文學士に候。して見ると傳四と僕とは同輩に候。同輩である以上は是から御馳走の節は萬事割前に致さうかと存候。

小生は生涯に文章がいくつかけるか夫が樂しみに候。又喧嘩が何年出來るか夫が樂に候。人間は自分の力も自分で試して見ないうちは分らぬものに候。握力抔は一分でためす事が出來候へども自分の忍耐力や文學上の力や強情の度合やなんかはやれる丈やつて見ないと自分で自分に見當のつかぬものに候。古來の人間は大概自己を充分に發揮する機會がなくて死んだらうと思はれ候。惜しい事に候。機會は何でも避けないで、其儘に自分の力量を試驗するのが一番かと存候

坊チやンを毎號御廣告に相成るのは恐れ入りましたね。しかも坊ちゃンが下落して四十錢になるに至つては愈恐れ入りましたね。まだ大分殘つて居ますか。

猫を英譯したものがあります。見てくれと云ふて郵便で百ページ許りよこしました。難有い事であります。然し人間と生れた以上は猫抔を翻譯するよりも自分のものを一頁でもかいた方が人間と生れた價値があるかと思ひます。

小生は何をしても自分は自分流にするのが自分に對する義務であり且つ天と親とに對する義務だと思ひます。天と親がコンナ人間を生みつけた以上はコンナ人間で生きて居れと云ふ意味より外に解釋しやうがない。コンナ人間以上にも以下にもどうする事も出來ないのを强ひてどうかしやうと思ふのは當然天の責任を自分が脊負つて苦勞する樣なものだと思ひます。此論法から云ふと親と喧嘩をしても充分自己の義務を盡して居るのであります。天に背いても自分の義務を盡して居るのであります。況んや隣り近所や東京市民や。日本人民や乃至世界全體の人の意思に背いても自分には立派に義理が立つ譯であります。是ではちと氣燄が高過ぎましたね。少々ひまになつたから餘計な事を書きます。

昔はコンナ事を考へた時期があります。正しい人が汚名をきて罪に處せられる程悲慘な事はあるまいと。今の考は全く別であります。どうかそんな人になつて見たい。世界總體を相手にしてハリツケにでもなつてハリツケの上から下を見て此馬鹿野郎と心のうちで輕蔑して死んで見たい。尤も僕は臆病だから、本當のハリツケは少々恐れ入る。絞罪位な所でいゝなら進んで願ひたい。

四方太先生愈々文章論をかき出しましたね。あれを何號もつゞけたらよからう。尤も文章論と申す程な筋の通つたものではない全く文話といふ位なものですな。鳴雪老人のは例によつて讀みません。漾虛集を御批評下さつてありがたい。ことに野菜づくしはありがたい。中央公論にね大魚に呑まれたる人といふ小說がありますよ。伊藤銀月といふ人のかいたものです。隨分妙な事をかきますね。然し中々新しい形容の言葉があつて刺激の強い文章です。序に讀んで御覽なさい。

色々かきましたね。いくらでもかけばいくらでも書けるがまづよしませう

どうです一日どこかで淸遊を仕らうぢやありませんか　頓首

七月二日

虛子大人

夏金生

六六

七月十一日　午後五時—六時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
小石川區音羽八丁目二十三番地森次太郎氏へ（一）

昨日は失敬致候

御尋ねの○○○○と申す男は昔は小生の同級生に候今は高等學校で同僚に候然し近來殆んど交際せず從つて此頃の同氏の人世觀其他一向承知仕らず候。又嫁をとる意向あるや否やも知らずとる積りならとくにもらふた筈と存候

女子大學の教師中には懇意のもの無之只大塚保治といふ人を知つて居り候

高著出版の件小生の出來る事なら本屋へ一二軒は聞いて見てもよろしく候

妻君の御馳走が出來損つて御病氣は風流に候自分で粥をにて食ふ抔は猶々風流に候下女を使はぬも風流に候。小生先日下女兩名を一時に解雇し面倒だから雨戸を開放して寐た事有之候。下女が出來ねば毎晩戸を立てないで、三度共パンを食つて掃除もしないでいつ迄も暮す積りに候ひし處又下女が兩名出來た爲め折角の計畫も無駄に相成候

先は右御返事迄　匆々頓首

七月十一日

森　次太郎様

六七

七月十七日　午後十一時―十二時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ（二四）〔はがき〕

拜啓猫の大尾をかきました。京都から歸つたら、すぐ來て讀んで下さい。明日は所勞休みだから明日だと都合がいゝ

十七日

夏目金之助

四六八

六八

七月十八日　午後零時―一時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
福岡縣京都郡犀川村小宮豐隆へ（一）

御手紙拜見川へ行つて鮎をとるのは面白いだらう僕も隨行の榮を得たい。猫の大尾をかいた。八月のホトゝギスには出るだらうと思ふから讀んでくれ玉へ夏は閑靜で奇麗な田舍へ行つて御馳走をたべて白雲を見て本をよんで居たい。大磯や箱根は大きらひ　あつくなるとぼんやりして氣が遠くなるそこへ人が來てのべつに入れ替り攻擊をやると到底持ち切れない。御客から見たら病人か厭世家の樣だらう。文章もかき上げると愉快だがかいてるうちは苦しいものだ。

胃が堅くなる。外の事は何にも考へられなくなる。一大心配が出來た樣な氣がする讀書はこれ程熱心になれないのはどう云ふものだらう

來月は講義をかゝなければならん。講義を作るのは死ぬよりいやだそれを考へると大學は辭職仕りたい。

薤露行を大變面白がつてくれる青年が往々ある。ある人手紙を寄せて薤露行の一篇吾に於て聖書よりも尊しとかいてきた文士の名譽も此に至つて極まる譯だ。然しあんなものは發句を重ねて行く樣な心持ちで骨が折れて行かない（原）

僕も國があつて山があつて河があつて家があつて最後に金があつたら嘸よからう。然らずんば胃病で近々往生可仕候　頓首

七月十七日

夏目金之助

小宮豐隆様

四六九

御ばゞ様の御病氣を大事になさい。御母さんによろしく

六九

七月十九日 午後十一時—十二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より
麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ（二五）〔はがき〕

昨日は失敬其節御話し致候ホトヽギスの寄贈所は小石川區久堅町七十四番地五十二號菅虎雄方に候間宜敷様御取計願上候　以上

七月十九日

七〇

七月二十日 午後十一時—十二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より
牛込區市ヶ谷藥王寺前町二十番地早稲田文學社内片上伸氏へ（一）

拜啓先日は失禮致し候兩度の御高來の節何か勝手に申述候雜談をわざ〳〵早稲田紙上御掲載相成度由にて原稿御廻付相成候には一寸閉口致候本來なら御斷りを致したき筈なれども折角の御勞力を無にするも失禮と存じ貴意の通に可仕候尤も貴稿は一應拜見不穩當と思ふ所など訂正致し候間右はあしからず御海恕被下度候　頓首

七月二十日　夏目金之助

片上伸様

七一

七月二十四日 午後零時—一時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より
小石川區竹早町百二十番地愛知社中川芳太郎へ（一〇）

毎々御面倒相願候處早速神田の方へ御送り被下候よし多謝の至り、いづれ印税が這入つたら何か御馳走可致候

學校を卒業して一日のうちに世の中が恐ろしくなつたから是から餘程注意を周密にする由結構に候

然し周密と云ふ意味に上等と下等あり。自己の智力にて出來得限り考へ、自己の感情にて出來

得る限り感じ。而して相手と自己とに不都合の破綻なき樣にするを上等といひ。只人を見て泥棒の如く疑ひ何でもコソ〳〵に先を制する樣な事を得意にする是を下等の周密と云ふ。

君の感じたるは如何なる方面に於ての意味なるやを知らず。もし前者ならば賢の方へ一歩進みたるなり。もし後者ならば愚の方へ一歩進みたるなり。世上幾多の才子は愚に近づきつゝ自ら賢に進むと思へり。利害の關係なき三者より忌憚なく是等の人を評して見よ。學校に居るうちの方が遙かに上等にして卒業して世の中に居る時の方が餘程下等なり。而も自らは頗るワイズになつたと考ふる人多し。是程いやな現象なし。

世の中が恐しき由、恐しき樣なれど存外恐ろしからぬものなり。もし君の弊を言はゞ學校に居るときより君は世の中を恐れ過ぎて居るなり。君は家に居ておやぢを恐れ過ぎ。學校で朋友を恐れ過ぎ卒業して世間と先生とを恐れ過ぐ。其上に世の中の恐しきを悟つたら却つて困る位なり。恐ろしきを悟るものは用心す。用心は大概人格を下落せしむるものなり。世上の所謂用心家を見よ。世を渡る事は卽ち是れあらん。親友となし得べきか。大事を托し得べきか。利害以上の思慮を闘かはすに足るべきか。

世を恐るゝは非なり。生れたる世が恐しくては肩身が狹くて生きて居るのが苦しかるべし。余は君にもつと大膽なれと勸む。世の中を恐るゝなとすゝむ。自ら反して直き千萬人と雖われ行かんと云ふ氣性を養へと勸む。天下は君の考ふる如く恐るべきものにあらず、存外太平なるものなり。只一箇所の地位が出來るか出來ぬ位にて天下は恐ろしくなるべきものにあらず。どこ迄行つても恐るべきものにあらず。免職と增給以外に人生の目的なくんば天下は或は恐ろしきものかも知れず。天下の士、一代の學者はそれ以上に恐ろしき理由を口にせずんば恥辱なり　勉旃勉旃

七月二十五日

芳太郎様

金

七二

七月二十八日　使ひ持參　本郷區駒込千駄木町五十七番地より小石川區久堅町七十四番地五十二號菅虎雄氏へ（二）

拜啓昨夜紀元會に出席々上君の奥さんの病氣の由をきゝたり隨分御大事御攝養可然候小生只今さしかゝりたる用事あ〔り〕見舞にあがらず。

毎月御返却の金子は君が避暑に出掛けたかと思つて今日迄控へて居た。遲延の段失敬。

金貳十圓は七八月兩月分なり御査收を乞ふ　頓首

二十八日

虎雄様

七三

八月三日　午後六時—七時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ（一三）

御手紙拜見昨日來てあれ丈話した上今日六錢印紙を張つて手紙をよこす人は滅多にあるまいと思ひながら讀んで見ると第一が猫の攻擊は多數決だから已を得んとあきらめて後世に知己を待つより外に仕方なし

作文編輯（原）につきての御注文は虛子へ文通致し置くべく墨汁一滴の著者へは申してやれぬから是も虛子で間に合して置くと致す。猫に至つては悉く御取りになつても差支なし

夫から尊稿出版の件は其うち本屋がき次第談判にとりかゝるべく候何とも受合はれないが。來た奴を一人々々つらまへる事に可致然し內容をもう少し知らないと說明に困るがね。

君に御辭儀をしたものは正に僕の妻にして年齡は當年三十。二十五六に見えたと申し聞かしても喜びさうもないから話さずに置く。僕の妻にしては若過ぎるとは大に此方を老人視したものだ。

寒月先生は神經質にして仙骨あるもの。彼は僕に向つてすら丁寧に御辭儀をしたる事なし況んや愚妻に於てをや

古語を復活せる新體詩人に付て大に激昂の體御尤も千萬の樣なれど實は小生未だ同君の詩を讀まず從つて毫も癪にさはらず

今日春陽堂の本多嘯月先生催促かた〳〵御來訪になる。僕唯々として汗をかいて原稿紙へ向ふ。中々苦しい。しばらくして春陽堂よりカクザトウ一罐著中見舞として來る

今度の小說の一部分はあるひは御氣に召すかも知れず實は君位が御氣に召さないと天下氣に召し手がなくなるだらうと思ふ。漱石（原）先生虛名を擁して毎月知己を後世に待つ樣では憫然なり　艸

艸頓首

八月三日

白楊先生

金

八月三日 午後六時―七時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ（三六）〔封筒裏の署名に「なつめきむのすけ」とあり〕

拜啓碧梧桐の送別會へはついに出られず失敬致候。文學士森田白楊なるものあり小生の敎へた男なるが今度作文の本を作るとかにて墨汁一滴のなかを二三滴君の文を一篇、僕の猫を一頁程もらひ度と申してきたり。どうか承諾してやつて下さい。

寒月來つて今度の猫を攻擊し森田白楊之に和す。漱石之に降る。

只今新小說の奴を執筆中あつくてかけまへん。　艸々の頓首

八月三日

虛子庵

二階下

金奴

七五

八月五日 午前十時―十一時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
上野國伊香保溫泉逢萊館野間眞綱へ（四一）〔はがき〕

むかし伊香保へ行つて人の家根ばかり見てくらした事あり。君は今雲を見てくらして居るだらう。今小說をかいて居る　多忙

七六

八月五日 午前（以下不明）　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
名古屋市西瓦町百〇五番戸中川芳太郎へ（一一）

おとつさんが御病氣で血を吐かれたさうな嘸御心配の事であろ其うちどうにかよくなるだろから安心して越路でも聞いて心配せずに御出でなされ。色々卒業していやな事ばかりでくさ〳〵するだろが其うち面白い事も出て來るだろ長い手紙を上げたいが今新小說の小說をかきかけて期限がせまつてひまがないから是丈にします　艸々

八月五日

よたさま

御許

金

七七

八月五日 午前十時—十一時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ（一四）

拜啓

虚子の返事に云く拙文おやくに立てば冥加至極に存じ上げ奉ります。墨汁一滴も差支無いこと
と信じます

生田先生は現代の知己なり先生の朗讀四十點猫の文章二十點併せて六十點にて及第の事と存候
新小説未だ脱稿せずあつくてかけまへん

中川の芳太郎君の御とつさんが喀血をしたと云ふて寄こした。不相變心配して居る事だらうさ
うかと思ふと越路太夫をきゝに行つたとある　艸々の頓首

八月五日　金

ナツール・ゲシヒテ様

七八

八月六日 午後零時—一時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ（一五）

早速御返事をかく也漾虚集の評はすぐさま拜見どうもあゝ長くかいてくれた御親切は甚だかた
じけない。天下の評中あの位詳細なのはないと深く感銘仕る譯である。今少し何とかわる口をか
く方がよからうと存候人格論は僕も至極贊成に候。然し僕のばかりが必ずしも人格を發揮した作
物でもあるまい。但主義はいつも御話しする通り文章を作るのは腹藝で筆藝ではないから腹をこ
しらへてかゝらねば駄目といふ也君と同論の樣に思ふ如何

ほかの人の評と夜雨君の作は新小説をかいてからゆるりと讀む積りなり。手紙が來ても邪魔に
はならず。生田先生の辯解とくと拜承。序に申候漾虚集は春水漾虚碧といふ句より來る。御三君
の文集の名は頗る洒落たものなり

小生千駄木にあつて文を草す。左右前後に居るもうろくども一切氣に喰はず朝から晩迄喧嘩な
り此中に在つて名文がかけぬ位なら文章はやめて仕舞ふ考なり。此間にあつて學問が出來なけれ
ば學問はやめて仕舞ふなり。手紙の十本や二十本來たつて詩想が妨げらるゝ樣なデリケートな文
章家にあらず。喧嘩をしつゝ、强勉をしつゝ、文章をかきつゝ、もうろくどもがくたばる迄は決

して千駄木をうつらずして、安々と往生仕る覺悟なれば君が夜中遊びにくる位の事は何でもなく候。

いゝ年をしてこんな事を云ふと笑ふなかれ僕の妻は御覽の如く若きが故に亭主も中々元氣がある也　先は其丈

八、六

金

白楊先生

七九

八月七日　午前八時―九時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
本郷區駒込西片町十番地畔柳都太郎氏へ（三）

拜復商業學校はどの邊なりや又學士でなくてはならぬにや實は一二年前の卒業にて久しく周旋をたのまれたる男あり然し是は撰科なり語學は比較的本年の卒業生のあるものよりも出來る也。新學士の地方行は先達迄一名ありし所只今長岡へ交渉中なりもしまとまらずば此方へ相談してもよろし但語學が特別えらいとは受合かね候

東風君苦沙彌君皆勝手な事を申候夫故に太平の逸民に候現實世界にあの主義では如何かと存候御反對御尤に候。漱石先生も反對に候。

彼等の云ふ所は皆眞理に候然し只一面の眞理に候。決して作者の人世觀の全部に無之故其邊は御了知被下度候。あれは總體が諷刺に候現代にあんな諷刺は尤も適切と存じ猫中に收め候。もし小生の個性論を論文としてかけば反對の方面と雙方の働らきかける所を議論致し度と存候

來九月の新小說に小生が藝術觀及人生觀の一局部を代表したる小說あらはるべく是は是非御讀みの上御批評願度候。是とても全部の漱石の趣味意見と申す譯に無之其邊はあらかじめ御斷はり申候未だ脫稿せず十日〆切迄に是非かきあぐる積夫故どこへも行かず夏籠の姿御無沙汰御ゆるし可被下候

八月七日

金

芥舟先生

八月（日附不明）　午後零時―一時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
鹿兒島縣肝屬郡高山村野村傳四へ（四六）〔はがき〕

傳四さん田舍は面白いだらう。東京も面白い。此年の土用は存外涼しい。毎日眠氣ざましに近所の下等野郎を罵倒してやる。是から十年もかゝるうちには彼等は少々は上品の何物たるを解するに至るだらう。ぼくは慈悲の爲めに千駄木に永住する也　艸々。執筆多忙。九月に逢ひましよ

八一

八月十日　午後零時―一時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
福岡縣京都郡犀川村小宮盤隆へ（三）〔はがき〕

先達は手紙をありがたう。牛の胃袋の話を二三行かりました。九日迄連日執筆この兩三日休養夫から講義をかく。人生多忙。

八月十日

八二

八月十日　午後十一時―十二時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ（二七）〔はがき〕

先刻はありがたう存じます。其節の馬の鈴と馬子唄の句は

春風や惟然が耳に馬の鈴
馬子唄や白髮も染めでくるゝ春

と致し候、矢張り同程度ですか

八三

八月十一日　午前十時―十一時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ（二八）〔はがき〕

拜啓昨日の駄句花嫁の馬で越ゆるや山櫻を、花の頃を越えてかしこし馬に嫁と致し候が御贊成下さい。是は凡董調です。前のと伯仲の間だと仰せられては落膽します。

『御前が馬鹿なら、わたしも馬鹿だ。馬鹿と馬鹿なら喧嘩だよ』今朝かう云ふうたを作りました。此人世觀を布衍していつか小說にかきたい。相手が馬鹿な眞似をして切り込んでくると、賢人も已を得ず馬鹿になつて喧嘩をする。そこで社會が墮落する。馬鹿は成程社會の毒分子だと

云ふ事を人に教へるのが主意です。先づ當分は此うた丈うたつてゐます。小説にしたらホトヽギスへ上げます。

八四

八月十二日　午後十一時―十二時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
山口縣玖珂郡由宇村三國屋鈴木三重吉へ（一五）〔はがき〕

君は一人で大きな屋敷に居るよし。御大名の樣でよからうと思ふ。僕例の如く多忙長い手紙をかく餘暇なし。君文章をかきたいならどん〳〵御かきなさい。書いてゐるければ其時修養がたりないとか何とかはじめてわかる也。かゝないうちはどんな名作が出來るかわからん。何でもどんどんやるべしと存候

八五

八月十五日　午後零時―一時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
廣島市大手町一丁目井原市次郎氏へ（一）

拜啓廣島の寫眞種々御惠送にあづかり本日落掌難有御禮申上候、あの寫眞は皆面白くながめ暮らし候

新聞の井原氏は大兄の御舍弟のよしそれはちつとも知りませんでした尼子さんは四郎と云ふ名です同町内に居ていつでも厄介になります。先日逢つたら飛んだ所へ引合に出されたと申されました。迷亭と云ふ男は定てありません。苦沙彌は小生の事だと世間できめて仕舞ました。寒月といふのは理學士寺田寅彦といふ今大學の講師をしてゐる人ださうです。是も世間がさう認定したのです。尤も前齒は缺けて居ます。

寫眞拜受難有候。御顏を見て始めて思ひ出しました。全くあなたとは固と御話しをした事がありますね。然し銅貨を落したのは慥かにあなたではありません。もつと脊の高い瘠せた人の樣に思ひます。あなたは寫眞では大變色が白いが小生の記憶（原）ではもつと黑いと思ひますどうですか。

尼子さんに逢つたらあなたの御話しをしませう。斗作先生に御文通の時小生の事をきいて御覽なさい。倫敦の時の事で何か面白い事を御話しなさるかも知れません　頓首

八月十五日　　夏目金之助

井原様

八六

八月二十六日　午前十時―十一時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
芝區琴平町二番地朝陽會野間眞綱へ（四二）〔はがき〕

先達ては久々にて御出での處生憎用談中にて失敬あの晩は十時半頃迄かゝつた夫から森田に飯を食はせたら十二時少し前になつた君等は引きとめられた上飯を食ひそくなつて定めし空腹であつたらう逗子の樣子御しらせ被下難有候先〔は〕御禮迄　草々

〔以下行間に朱書〕
昨日傳四瓢然歸來。大島紬を二反もつてくる。但し御見やげにあらず。暴風雨にて垣愈危うし。講義は一頁もかゝず。北郷先生はもう歸りましたか

八七

八月二十七日　午後二時―三時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
大分縣臼杵町平清水野上豐一郎へ（一）〔はがき〕

御自製の繪端書難有存候江渺々一帆を張つて行きたい方へ行つて見たく候。休暇中毎日來客是でも中々多忙なるには驚き候。書生、青年、雜誌屋、本屋を除いては全く蝸廬を訪問するものなし妙な生活に候。夫で澤山に候。夫も多過ぎる位に候。

八八

八月二十八日　午後十一時―十二時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
福岡縣京都郡犀川村小宮豐隆へ（三）

大坂原ノ滑稽新聞所載の寫し。
學生がキリヌキを送つてくれた

夏だから客はないと思ひの外毎日々々繁昌で樂々畫寐も出來ず閉口してゐるうち八月も御仕舞

になつて大に驚ろいて弱つてゐる實は講義を一ページも書いてゐない。然し而して十月一日發行の中央公論にかく約束がある進退に窮する譯であつて見れば講義は容易には始まりさうにもない。まづ以て十五日以後二十以内と見當をつけて御出京可然候。今日狩野亨吉先生に京都の模樣をきいたら京都の法科大學抔は十月中頃から開講するさうだ隨分のんきなものである。僕も其うち東京の文科大學で十二月位に開講して見樣と思ふ。

猫の批評こま〳〵難有候苦沙彌と迷亭の比較御尤に候。あれで一段落ついてまづ安心致し候。然し出來るならばあんな馬鹿氣た事を生涯かいてゐたい。それでないと。腹へつめたものがもたれて困る。猫の十一を非難せるもの二人ばかりありたりその一人の曰く終りの方の文明の議論が人によつて調子が變つてゐない。迷亭が喋舌つても苦沙彌が述べても同じ語氣であると。御尤もなる攻撃に候。

今度は新小説にかいた。九月一日發行のに草枕と題するものあり。是非讀んで頂戴。こんな小説は天地開闢以來類のないものです（開闢以來の傑作と誤解してはいけない）

今度の中央公論へは何をかゝうと思ふてゐる。今日は久し振りで朝から晩迄外出方々あるいてくたびれた。　艸々

八月二十八日

なつめ金

小宮豐隆先生

八九

八月三十日　午後零時―一時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
芝區琴平町二番地朝陽館野間眞綱へ（四三）〔はがき〕

拜啓草枕を明治文壇の最大傑作といふてくれる人はたんとあるまい。普通の小説の讀者は第一つまらないと云ふて笑ふだらう。だから新小説に氣の毒である。謹んで高評を謝す

九〇

八月三十一日　午前十時―十一時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ（二九）

先生驚ろきましたね僕の第三女が赤痢の模樣で今日大學病院に入院したといふ譯ですがね。ことによると交通遮斷になるかも知れません。小供の病氣を見てゐるのは僕自身の病氣より餘程つらい。しかも死ぬかも知れないとなるとどうも苦痛でたまらない。もしあの子が死んで一年か二

年かしたら小説の材料になるかも知れぬが傑作抔は出來なくても小供が丈夫でゐてくれる方が遙かによろしい。到底草枕の筆法では行きません。

猫の代正に頂戴難有候漠然會なるものが出來るよし出られゝばいゝが。

新小説は出たが振假名の妙癖〔奇〕林なのには辟易しました。ふりがなは矢張り本人がつけなくては駄目ですね。

もう九月になる講義は一頁もかいてない。中央公論は何をかいたものやら時間がなさゝうだ。是で小供の病氣がねる(原)ければ僕は何も出來ない。中央公論には飛んだ不義理が出來る

然し交通遮斷は一寸面白い。あまり人がきすぎて困るからたまには交通遮斷をして見たいと思ひます。

野間先生が草枕を評して明治文壇の最大傑作といふて來ました。最大傑作は恐れ入ります。寧ろ最珍作と申す方が適當と思ひます。實際珍といふ事に於ては珍だらうと思ひます

八月三十一日　　金

虚子先生

九一

九月二日　夕　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
本郷區本郷六丁目二十五番地藪中方野村傳四へ（四七）

拜啓別紙の通り通知有之候處拙宅では三女が赤痢で入院中交通遮斷なり（尤も内々では出る）然し棄てゝ置いてもわるいと思ふから若し時間の餘裕があるなら君僕の代理に會葬してくれ玉へ。

右用事迄　艸々

病人は助かりさうである。金は入りさうである。講義はかけさうもないのである。中央公論はかゝねばならぬ樣である。

九月二日　　夏目金之助

野村傳四樣

九二

九月二日　夜　本郷區駒込千駄木町五十七番地より

嵐拜見先づ面白い方に候

結末の五六行は大家に候。あれ位短かくしてしかもあれを仕舞に置く所が尤もよろしく候。短篇は是で持つものに候。ドーデ抔はこの呼吸を心得た人に候。君もこの呼吸を心得た人に候。

嵐の前の景色よろしく候。あとの景色もよろしく候。只肝心の嵐が一向引き立たぬ氣が致し候。今少し何とかしたら凄ぐ原なつたらう。又熊公の嵐後の様子が反映してよろつたらう。

「海は地の底から重く遠くうなつて來る」の一句既に時間を含くんで居るのみならず。既に嵐の經過を豫期せしむる如き書方である。此好句を冒頭に置きながら其つぎの節から一節毎に嵐の吹き募る模様を漸々深く切り込む様に書か（卽ち時間的に）ないのは殘念だと思ふ。

嵐の一篇はホトヽギスに送つてよければ僕から送ります。虛子は不相變贊辭を呈する事と存候草枕については大部諸方から贊辭を頂戴した。大概は端書でほめてくれる。碧梧桐も旅行先から端書をよこした。同人の事だから必ずあとにわる口がついてゐる。曰く警句は多いが皆川の流れの如く同傾向であるから仕舞には警句の用をなさぬと。說明を承はらんから意味が分らない。

昨夜巡査と衞生員と東京市の醫員と小使が二人來て淸潔方を施こして行つた。今日は警察醫が健康診斷をしに來た。六日迄外出を禁ずるのださうだ。四方太が來て話して行つた。僕は病院へ見舞に行つた妻は湯に入つた。是ならどこが交通遮斷か分らない。

病人は大分よろしいまあ助かりさうだ。其代り大分金が入る。今日一日何もせんで中央公論の趣向を考へてやつたが別段名案も浮ばない一寸したもので御免蒙らうと思ふ。

一昨日新小說の男が來て今度の號は二十七日に出て二十九日に賣り切れたから廣告をやめたと云ふた。おどされて買つたものゝうち讀んでつまらんものだと思ふたものが大部あるだらうと思ふと氣の毒だ。覇王樹の處は虛子が大にほめて吳れた所だ　以上

九月二日夜

寅彦様

金

九三

九月三日　午前八時—九時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より

麹町區富士見町四丁目八番地高濱淸氏へ（三〇）

拜啓御手紙ありがたく候病人は存外よろしく候此分にては一命丈はたすかる事と存候只今の處交通遮斷なれど好加減に出たり這入つたり致し居候

寅彦嵐と題する短篇を送りこし候例の如く筆を使はないうちに餘情のある作物に候十月分のホ

トヽギスに御掲載被下べくや。御郵送申上候。今日中央公論の末尾に小生等の作を讀者に吹聽する所を觀て急に中央公論へかくのがいやになり候。何ぼほめられるのがいゝと申してあゝ云はれて一生懸命に十月號に書いてやらうと云ふ氣にはなれなく候が如何。今度瀧田に逢つたらあまり廣告が商賣的だと申してやらうと存候　以上

九月二日夜　　金

虚子庵

九四

九月三日　午前八時—九時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
本郷區駒込西片町十番地畔柳都太郎氏へ（四）〔はがき〕

二返讀んでもらふのは恐縮だ。女が崖の上へ出る譯はかいてない。從つて只出たと思へばいゝのです。出た風情が面白ければ夫丈で苦情を云はずに置いて下さい。僕の家に赤痢がぴよこりと出て公向きは交通遮斷なり。内々は交通自在なり。一寸昔しの侍が閉門になつた樣な氣がして面白い。患者は大學病院にゐる。助かりさうだ

九五

九月六日　午後三時—四時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
芝區琴平町二番地朝陽館野間眞綱へ（四四）〔はがき〕

病人は漸く快方此分にては大丈夫に候。下痢のよし。御大事になさい。寐て粥を食ふがよからう。僕はいそがしいのにぶら〳〵して何もせぬ。文章を二三枚かいていやになる。客はくる。

九六

九月六日　午後三時—四時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ（一六）

御歸京のよし小生宅には三女赤痢にて大學醫院へ入院今日迄交通遮斷なり。遮斷にも關はらず方々出あるくのみならず來客無暗に至る。學校の講義は一ページも書かず。十月發行の中央公論からは催促をうけるいやはやのはやいやで困却中なり

草枕を讀んで下された由難有い。其上あつと感心してくれた所などは尤も難有い。あれはどう

しても君に氣に入る場所があると思つた。今日迄草枕に就て方々から批評が飛び込んで來る。來る度に僕は喜こんでよむ。然し言語に絶しちまつたものは君一人だから難有い。今日迄受取つた批評のうち尤も長く且つ眞面目なものは深田康算先生のものである。尤も驚も感情的なものは君のである。多少けちをつけたものが二三人ある。いづれもうれしい。僕はまとめて持つてゐる。今日中川君が來たから其事をはなしたら出版したらどうですと云ふた。草枕批評一斑として出版したら早速僕は草枕の原稿料の上へ幾分か持ち出さなければならなくなる。

僕今日中川先生に倫敦製フロックコート一着を獻上仕つた。着せて見たらよく似合つた。先生大きな風呂敷へたゝみ込んで歸つて行つた。君あやめ會では詩體詩人が喧嘩をしてゐるよ。昔は詩人が喧嘩抔をと云つたものだ。今ぢや詩人だから衆に先つて喧嘩をするのだ

いづれ其うち　左樣なら

九月五日

金之助

森田米松樣

九七

九月十日　午後二時—三時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
本郷區駒込西片町十番地反省社内瀧田哲太郎氏へ　(二)

拜啓先日來御約束の小說どうにかかうにかかき上げ候。まことに杜撰の作にて御恥づかしき限なれど誤つて違約をしては大變な御迷惑になる事といゝ加減にかき了り申候四五十枚との御約束の處とう〳〵六十五枚程になり候是も御ゆるし被下度候御序の節はいつにても御渡し可申候先は用事迄　草々頓首

九月九日

金之助

瀧田樣

九八

九月十一日　午後零時—一時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ　(三一)

拜啓來る二十六日の能に御招き被下難有奉深謝候西洋人も定めてよろこぶ事と存候尤も通辯を仕るのは少々閉口に候。あの番組のうちで一つも見たものも讀んだものもありません橋口は兄の

方ですか弟の方ですか小兒病氣は日にまし快方小生見舞に參り候へども未だ一度も語を交せたる事なし草枕の作者の兒丈ありて非人情極まつたもの也すると今度は妻のおやぢが腎臟炎から腦を冒かされたとか何とか申す由世の中も多忙なものに候。小生も御客の相手で一人を暮らして居る樣也驚ろいたのは今日女記者の中島氏とか申す人が參られたる事也此女猫を愛讀して研究する由草枕でも讀んでくれゝばいゝのに。二六をすぐ買つてよみました。あの人は面白い考を持つて居るがあまり學問のない人と思ひます。然しよく趣味を解する人であります。今度の中央公論に二百十日と申す珍物をかきましたよみ直して見たら一向つまらない。二度よみ直したら隨分面白かつた。どう〔いふ〕ものでせう。君がよんだ〔ら〕何といふだらう。又どうぞよんで下さい。左樣なら

九月十日

金

虛子庵

梧下

九九

九月十一日 本郷區駒込千駄木町五十七番地より
本郷區駒込西片町十番地反省社内瀧田哲太郎氏へ（三）

拜啓小説二百十日原稿御渡し申候間御落手被下度候試驗にて御多忙のよし御勉强專一に候娘病氣大分よろしく候

二百十日は昨日また讀み直して見た處始めてよんだ時より少しは面白く存候不相變殺風景な女向きのせぬものに候善惡ともに御批評被下候はゞ幸甚先は用事のみ　草々頓首

九月十一日

金之助

瀧田哲太郎樣

一〇〇

九月十三日 午後零時―一時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
麴町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ（三）〔はがき〕

西洋人にはまだ逢はんから逢つて椅子が欲しいかどうか聞いて見ませう。日本ずきだから坐るといふかも知れない。三崎座で猫をやる由成程今朝の新聞を見たら廣告があつた。寺田も知らせ

て來ました。然も忠臣藏のあとだから面白いと書いて來ました。猫が芝居にならうとは思はなかつた。上下二幕とはどこをする氣だらう。僕に相談すれば敎へてやるのに

一〇一

九月十四日 午前十時—十一時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ（三三）〔はがき〕

今夜三崎座の作者田中霜柳といふ人が來て猫をやるから承知してくれといひました。仕組もききました。二三助言をしました。苦沙彌が喧嘩をする所がある呵々。
見に來いと云ふた。どうです

一〇二

九月十四日 午前十一時—十二時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
麹町區中六番町五十七番地中根重一氏方夏目鏡へ（三三）

昨夜電報にて御病人御危篤の由承知致候嘸かし御心配の事と存じ候。いつ迄もそちらに御逗留の上御看病可然と存候
當方はどうにで〔も〕相成候今日宮田とか申すものゝ妻親類に取り込みある由にて歸宅致候。又くる積りか、來ぬ積りか知らず。來なくとも差支無之候。今居るキツとかキチとか何とか申す妙な名の女も歸り候ても決して御心配に及ばず。矢張りそちらにて御看病御大事と存候
私學校の方いそがしく且つ例の如く神經衰弱にて御見舞にも參りかね候皆樣へよろしく御申傳へ願候
金錢上の事につき御相談も有之候はゞ遠慮なく御申聞相成度候。あるものはある丈御用立可申候　以上

九月十四日

金之助

鏡　どの

昨夜緒方氏の書生參り病院の都合如何と相尋ね候故御蔭にて入澤氏の方都合つきたる旨答へ置候。混雜すみ次第御禮に御出向可然と存候

一〇三

九月十八日 午後零時—一時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ（三四）〔はがき〕

ぼくの妻の父死んで今週は學校を休む事にした。その外用事如山。三崎座を見たいが行けるかしら。もし行けたら御案内を仕る積りなり

一〇四

九月十八日 午後零時—一時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
本郷區駒込西片町十番地畔柳都太郎氏へ（五）

拜啓學校へ出やうと思つて居る所へ親類のものが急病で死んだから今週はやすむ事にした。小供はまだ病院にゐる然しもはや全快にちかい。閉門はとくに御ゆるしになつた。實は閉門中から出てあるいた。學校へ出ないた〔め〕出るのがいやだ此儘ずる〳〵に辭職したい。君は學校へ出たくなる方だから結構だ。

先達て三崎座の作者の田中霜柳といふ人が來て猫を芝居にするから許諾してくれといつた。女がやるんだから面白い然かも忠臣藏のあとだから猶面白い。猫をやるなら猫的な人間がよらなければ出來る筈はない。女役者抔がやれば妙なものにして仕舞ふばかりだ

キンチエスターは僕も讀んだ事がある面白かつた。今は大部分忘れて仕舞つた

近來來客で食傷の氣味なり。先日突然一個の青年が來て小説の弟子にしてくれと云つたのには驚いた。其前には一人の女記者が來て一時間ばかり話したにも珍らしい心持ちがした

草枕の畫工見た樣になつて一ヶ月ばかり遊びたい。いづれそのうち御目にかゝります　艸々以上

九月十八日

芥舟學兄　　金

一〇五

九月十九日 午前八時—九時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ（三五）

拜啓先日頂戴仕つた能の番組も時間も御手紙を紛失仕つて忘れて仕舞つた。どうぞ今一返知ら

せて下され。實は今週中休むから手紙で西洋人へきゝ合せてやらうと思つた所が時間も何も分らず夫が爲め又々御面倒をかける甚だ相濟まん。夫で入口では高濱さんの座ときゝますかな。もし西洋人がさしつかへたなら誰か連れて行つて見ませうか夫とも君の方にだれかゐますか又は御互に知り合のうちを御指名被下れば引張り出します　以上

九月十九日

虚子庵

置二階下

金

一〇六

九月二十二日　午後三時—四時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
下谷區谷中清水町五番地橋口清氏へ（八）

拜啓先日御面倒をかけ候藏書符の義兩三日前モリス氏に送り候處大滿足の由にて篤く御禮を述べてくれる樣にとの事に御座候ほめて來た手紙のうちには色々な言葉あれども面倒故略して追て御尊來の節御目にかけ可申候御蔭にて小生も約束を終へ寔に難有奉謝候　以上

九月二十二日

橋口清樣

夏目金之助

一〇七

九月二十二日　午後三時—四時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ（三六）

拜啓西洋人は大に感謝の意を表し來り候椅子は入らぬ由何だか日本服をきて出陣する模樣なり是でなくては能抔は見られぬ事と存候

十月號には面白いものが出ますか僕も何か書きたいが當分いそがしくて駄目である

三重吉が來て四方太の文をほめて居た。御互に惚れたものでせう　頓首

九月二十二日

虚子先生

金

一〇八

九月二十五日 午前八時—九時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
芝區高輪車町四十八番地皆川正禧へ（九）〔往復はがき返信用〕

風ガ「ジベツト」ヘ當ツテ鳴ルデハナイカ。彼等（卽チ「ジベツト」カラブラ下ガツテ首ヲ釣ラレテ居ル死人等）は皆躍を躍ツテゐるデハナイカ（on nothing トハ「空デ」ト譯スベシ。普通ノ踊ヲオドル者ハ床ノ上トカ地ノ上トカ足ノ踏まへる所ガアレモ、首ヲ釣ツタ所刑人ガ踊ヲオドルトスレバ空ヲ踏ンデ踊ルヨリ外ニ仕方ガナイノデアル）御前方（卽チブラサガツテゐル連中ニ話ス樣ニモテナス）ハイクラ空中デ踊ツテモ暖カニハナラナイヨ。——イやヒドイ風ダ。ソラ、ダレカ落チタ樣ダ（ジベツトカラ風デ繩ガ切レテ地ヘ落チタ音ヲ想像サセルナリ）メドラーの木（三本足ノメドラーダ。——卽チジベツトノ事大體ハ two-legged tree ト云フガコヽハ三本足トアル）カラ、メドラーガ一ツ落チテ木ニナツテ居ルノガ一ツ減ツタ（所刑人ヲメドラーニタトヘタルナリ）

〔以下行間に赤インキにて記しあり〕

アダムス・アツプルとは生理學上咽喉ノ所ニアルグリ〳〵ヲサス。字引ヲ引イテ見給へ。呼

吸ガ此所デツマツタト云フ意ナリ。決シテ酒抔ノ意味ニアラズ

一〇九

九月三十日 午後零時—一時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ（一七）

草枕の主張が第一に感覺的美にある事は貴說の通りである。感覺的美は人情を含まぬものである（見る人から云ふても見られる方から云ふても）

(一)自然天然は人情がない。見る人にも人情がない。雙方非人情である。只美しいと思ふ。是は異議がない。

(二)人間も自然の一部として見れば矢張り同じ事である。

(三)人間の情緒の活動するときは活動する人間は大に人情を發揮する。見る人は三樣になる

(a)全く人情をすてゝ見る。松や梅を見ると同樣の態度（是は一ト二ト同じ事に歸着する）

(b)全く人情を棄てられぬ。同情を起したり。反感を起したりする。然し現實世界で同情したり反感を起したりするのと異なる場合。卽ち自己の利害を打算しないで純粹なる同情と反感の場合。（吾人が普通の芝居を見る場合）

(c)現實世界で起す同情と反感を起して人間の活動を見る場合（此場合が芝居抔へ切り込むと時々見物人が舞臺へ飛び上がつて役者をなぐつたり抔する。フランスで兵士の見物がオセロを拳銃で打つた事がある）

草枕の畫工の態度で異議のある所は第三であるからして第三の(a)か(b)か(c)かをきめて見ればよい。(c)では無論ない。畫工は可成(a)で見やうとする。よし(a)丈で見られないでも全然(b)になつてはもういやだと云ふ男である。だから、一歩を讓つて(a)を離れても(b)迄は飛ばない。(a)と(b)の中間位である。

(い)「憐れ」が表情になつて女の顔にあらはれるのが(a)で見て居られぬ事はない。「憐れ」の表情が感覺的に畫題に調和するか。又はそれ自身に於て氣持がいゝ表情かわるい表情か　換言すれば單に美か美でないかと云ふ點からして觀察が出來る。（畫工が此態度で居れば「憐れ」といふのが人情の一部でも、觀察の態度は矢張り純非人情である）

(ろ)女の顔に憐れが出て夫が亭主の爲めに出たのだから感心である。大に同情を寄すべき女である。見上げたものである。從つて畫工も思はず憐れを催した。――かうなると普通の芝居の心持ちである。（草枕の畫工は多分こゝ迄ば原人情的になつて居るまいと思ふ）

(は)憐れが出たので矢張り亭主に未練がある。未練があるとすれば畫工にはそれ丈冷淡であつた。なんだ馬鹿々々しい。今迄はおれに惚れて居たのにと思ふのが現實界の態度である。此場合には

自己の利害の爲めに亂さるゝからして結構な女の心行きが却つてにくらしくなる。（草枕の畫工は無論こゝには居らぬ）

沙翁がハムレットをかく時の了見は分らないが(い)ではないに極つて居る。(は)でもあるまい。恐らくは(ろ)であらう。（卽ちハムレットを見る觀客の起す了見と同一であつたらう）

從つて草枕の畫工の態度と沙翁とは違ふ。截然として區別がつかぬかも知れぬが傾向が違ふ。沙翁は(ろ)に住する傾向がある畫工は(い)にもどる傾向がある。(いとろ)をならべて矢で方向を示すと沙翁の態度は ⇒ である。畫工の態度は ⇐ である。兩方とも離れたがつて居る。

畫工は非人情的である。沙翁は純人情的である。而して吾々日々夜々パンに汲々として喧嘩をしてくらす人間は俗人情的である」

> 作家は作家の考がある通り批評家は批評家の見識がある。君の云ふ事は僕の考で毫も曲ぐべき必要はない。只考丈を云ふ迄である。

畫工は紛々たる俗人情を陋とするのである。ことに二十世紀の俗人情を陋とするのである。否之を陋とするの極純人情たる芝居すらもいやになつた。あき果てたのである。夫だから非人情の旅をしてしばらくでも飄浪しやうといふのである。たとひ全く非人情で押し通せなくても尤も非人情に近い人情（能を見るときの如き）で人間を見やうといふのである。」

御能拜見の事承知致候。今度行く折があつたら誘つて上げませう。
此間メレヂスの事をかいた人がある此本を取り寄せる積りの處まだ取り寄せない。ハーデーの事もかいたものがある様に記憶する。記憶がわるいから忘れて仕舞ふ。調べて置いて上げやう。

九月三十日　　夏目金之助

森田米松様

一一〇

十月一日　午後三時—四時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ（三七）［はがき］

拜啓先日は御能拜見仰付られ難有仕合に存じ奉り候。西洋人大喜にて今度ある時も知らせてもらひたい抔と申し居候　以上
僕の後ろに居た西洋人ハ下等ナ奴ダ。アンナ者ガ能ヲ見ニ來タラ斷ハルガイヽ

一一一

十月二日　午前八時—九時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ（一八）

御手紙拜見人情から非人情にうつる所が面白いとの議論面白く候。偖かねて御依頼の三名家文集の義本日服部主人參り候につき談合致し候處ともかくも原稿を拜見致し度との事なり。よつていつでも御序の節御三君の名文をあつめたものを一寸御見せ下さい先は用事のみ　草々不一

十月一日夜　　夏目金之助

森田白楊様

一一二

十月四日　午前十一時—十二時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
本郷區駒込曙町十一番地大谷正信氏へ（四）

尊書拜見毎々御懇篤なる御褒辭を賜はり却つて慚汗の至に存候草枕はある一部の人には大受に

て小生も大にうれしく存候三度讀んだ人は大兄を入れて是で三人目に候。尤もある人は小兒を失ひて引き籠り中毎々草枕をよんだと書いて參り候が是は少々御まけの樣に候。今日明星と申す雜誌を見たら議論が多くて文章にも穴があると一二行程かいてあり候

二百十日はかねての約束にて不得已執筆夫故可成骨の折れぬ樣會話に致し候あれを例の流義で長くかいたら依然として冗長なものになり可申か呵々　右は先づ御挨拶迄　草々頓首

十月三日

金之助

繞石兄

一一三

十月四日　午後四時―五時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
牛込區早稲田鶴卷町一番地坂元（當時白仁）三郎へ（一）

拜啓先日相願候妹尾福松氏教員檢定試驗免狀の件其後如何相成候や實は本人より聞き合せ參り候。是は本人へ去月十二三日に至ればわかる由を申し聞け置きたるによる事に候。甚だ御迷惑ながら會議の結果一應御令兄へ御きゝ合せ被下間敷候や右願用迄　艸々不一

十月三日

夏目金之助

白仁三郎樣

一一四

十月八日　午前八時―九時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
小石川區原町十番地寺田寅彦へ（一五）〔はがき〕

本日は留守へ御出失敬。「二百十日」の評ありがたく拜見。大に辯護致し度候。今度から木曜の三時からを面會日と致すにつき御來遊被下度候

令甥も時々つれて成（原）されたく候　以上

一一五

十月八日　午前（時間不明）　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
芝區琴平町二番地朝陽館野間眞綱へ（四五）〔はがき〕

拜啓小生是から毎木曜日三時よりを面會日と相定め候につき時々遊びに御出下さい

十月七日

一一六

十月八日 午前八時—九時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ（三八）〔はがき〕

拜啓ホトヽギスの豫告は驚ろきましたね。小生來客に食傷して木曜の午後三時からを面會日と定め候。妙な連中が落ち合ふ事と存候。ちと景氣を見に御出被下度候

一一七

十月八日 午前八時—九時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
本郷區本郷六丁目二十五番地藪中方野村傳四へ（四八）〔はがき〕

拜啓本日は娘を難有く存候小生今度から木曜日の午後三時からを面會日と定め候故遊びに御出被下度候　以上

十月七日

一一八

十月九日 午前八時—九時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ（三九）

二百十日を御讀み下さつて御批評被下難有存じます。論旨に同情がないとは困ります。是非同情しなければいけません。尤も源因が明記してないから同情を強ひる譯にゆかない。其代り源因を話さないでグー〳〵寐て仕舞ふ所なぞは面白いぢやありませんか。そこへ同情し給へ。碌さんが最後に降參する所も辯護します。碌さんはあのうちで色々に變化して居る然し根が呑氣が人間だから深く變化するのぢやない。圭さんは呑氣にして頑固なるもの。碌さんは陽氣にして、どうでも構はないもの。面倒になると降參して仕舞ふので、其降參に愛嬌があるのです。圭さんは鷹揚でしかも堅くとつて自說を變じない所が面白い餘裕のある逼らない慷慨家です。あんな人間をかくともつと逼つた窮窟なものが出來る。又碌さんの樣なものをかく「と」もつと輕薄な才子が出來る。所が二百十日のはわざと其弊を脫してしかも活動する人間の樣に出來てるから愉快なのである。滑稽が多過ぎるとの非難も尤もであるが、あゝしないと二人にあれだけの餘裕が出來な

い。出來ないと普通の小説見た樣になる。最後の降參も上等な意味に於ての滑稽である。あの降參が如何にも飄逸にして拘泥しない半分以上トボケて居る所が眼目であります。小生はあれが掉尾だと思つて自負して居るのである。あれを不自然と思ふのはあのうちに滑稽の潛んで居る所を認めないで普通の小説の樣に正面から見るからである。

僕思ふに圭さんは現代に必要な人間である。今の青年は皆圭さんを見習ふがよろしい。然らずんば碌さん程悟るがよろしい。今の青年はドッチでもない。カラ駄目だ。生意氣な許りだ。以上

十月七日　〔封筒の裏に〕

金

虛子先生

能の事難有存じます。矢張九段であるのですか。いつあるのですか。一寸敎へて下さい。正月は何かかいて上げたいと思ひます。然し確然と約束も出來かねます。まあ精々かく方にして置きませう

一一九

十月九日　午後十一時―十二時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ　（一九）

拜啓只今服部主人來訪「はなうづ」出版致し度旨申候。夫については川下先生の長詩は少々困るから他の美文とか小説と「か」いふものと取りかへて頂きたい由。如何なものにや　劇詩戯曲は差支なけれど長詩は營業上駄目のよし。江村先生には氣の毒なれど君の取計でどうかして貰ひ度候。夫から製本は念を入れて充分美裝する由。原稿料は印税として壹割（ドコ迄行つても）にしたき由。夫から「はなうづ」と云ふ名の外にもつといゝ名はないかと申候。夫から僕に序をかいてくれと申候。是は君がたの方で御迷惑でなければ折角周旋したものだから何かかゝうと思ふ。出版は目下活版屋非常の多忙故本年中に手をつけかねる故來年一月着手の由

右至急御報知申候。どうか長詩の所丈をよろしく願たい　以上

十月火曜日夜

金之助

白楊先生

一二〇

十月十日　本郷區駒込千駄木町五十七番地より

若杉三郎へ（巴）

二百十日についての御批評拜見隨分思ひ切つてわる口を承はり大に面白く候。所であれは傾向小説でも象徴小説でも何でも構はない。そんなものは讀んだ人が勝手につけるのである。アート・フォー・アート抔は是亦どうでもよい。アートが下手ではいけない。然しアート丈がいゝのではない。剛健趣味は結構だ。文部大臣がどんな主義でも構はない。中央公論に適しない事はない。別に中央公論むきは柔弱主義といふ譯はない。筆蹟をまづいと云ふが外の大家は僕よりまづい。僕はあの二百十日　夏目漱石が甚だうまいと思つてゐる。大家揃ぢやない小學生揃だ。君はあれを餘所行の筆蹟でないといふが、僕の筆蹟には餘所行も不斷着もない。いつでもあの通りうまいのである。

猫を女役者がやる。本郷座だつて女役者だつて同じ事だ。猫をやつて面白い芝居が出來る爲めには僕自身がやらなくつちやいけない。中川芳太郎が見て來て極めて愚なものだといつた。愚は始めから知れ切つてゐる。

猫を圖書館に獻上するなんて隨分人を馬鹿にしたものだ。尤も僕も高等學校へ獻上した。此次は皇室と宮家へ一部宛獻上しやうかと思ふ。宮樣抔はちと猫を御覽になつたらよろしからうと思ふ。

モリエルの事に關した寫眞や何かは一枚もない。先達てマンチウスの四卷目を誂へて置いたがまだ來ない。だから駄目だらう。兎に角に活動あらん事を希望する。明治の文學は是からである。今迄は眼も鼻もない時代である。是から若い人々が大學から輩出して明治の文學を大成するのである。頗る前途洋々たる時機である。僕も幸に此愉快な時機に生れたのだからして死ぬ迄後進諸君の爲めに路を切り開いて、幾多の天才の爲めに大なる舞臺の下ごしらへをして働きたい。さうかうしてゐるうちに日は暮れる急がなければならん。一生懸命にならなければならん。さうして文學といふものは國務大臣のやつてゐる事務抔よりも高尚にして有益な者だと云ふ事を日本人に知らせなければならん。かのグータラの金持ち抔が大臣に下げル頭を文學者の方へ下げる樣にしてやらなければならん。

皇太子や宮樣が文學を御讀みになつて其主意がわかる樣に書いて上げなければならん　左樣なら

十月十日

若杉兄

夏目金之助

十月十一日 夜　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ（三〇）

花うづの内君の分と生田君のある部分とを見直した。君のに就て極遠慮のない事を云へばいづれも物足らない。何だか要領を得ない感じが多い。君は出來る丈悲酸で深刻で皮肉な問題を捕へてくるにもかゝはらず。よんだあとの感じが悲酸でも、深刻でも皮肉でもない。

其解決はどう云ふ點にあるか一寸考へた所を參考に述べる。

(一)事件に發展がなくして、比較的長い事を一二枚でかいてしまふ。だから讀者は君につり込まれる程作中の人物に同情がない。

是が大源因だらうと思ふ。換言すれば長くかくべきものを短かくかいて然も長くかいたものと同樣の感を起し得るものと假定して居るらしい

(二)君は文章に骨を折る。然し其骨折はレトリックに骨を折るのである。レトリックは無論必要であるが。白粉の如きものである。眞の文章は女の營養や心的狀態から來る表情の如くベニや白粉とは違ふ。文章のうまいにかゝはらず感じが乘らぬのは口調や文字に許り骨を折つて、敍出するものゝベゼールングが出來ぬ爲ではあるまいか。

(三)所々に奇警な句がある。ハツト思はせる程のものがある。（重に人世上の觀察）是程の急所をつらまへて居る人が何故此句をもつと活かして使はないかと思ふ。たとへば夫れ自身が一句で慥かに一短篇の主意となり得るにも關はらず君は(原)君は惜氣もなく好い加減な所へ使つて仕舞ふ。而して全篇から云ふと左程奇警でない。ある時は幼稚である。すると何だか妙な氣がする。此作者は時々老成な觀察をする點から云へば四十前後であるが若い方から云ふと二十を多く越してゐない。二十三四の男と四十位な男が合併して居る樣だ。夫がうまく調和すればいゝが片手丈が四十位であつたり何かする。

僕の遠慮のない批評は正にこゝである。要するに花うづ中にある君の作は決して未來に君を重からしむるものではない。もし君に大作があればそれは未來である。是から愈奮發して立派な作物(原)を苦心せられん事を希望する。もし餘暇あらば正月迄に是非兩三篇を新作せられん事を希望する

寅彦の嵐は彼の作としてあまり秀逸ぢやない。嵐の前後丈かいて肝心の嵐をかゝないなんてずるい男だ尤も最後の二三行「あの人も御かみさんの居る時分云々」は君と絶對的反對で大贊成である。あの下女の言葉があつて始めて熊さんの長い間の變化やら歴史やらが一句のうちに纏められて、讀者はうんさうかと云ふ氣になるのである。短篇でもし長い歴史を感ぜしむる爲めにはあれ云ふ筆法でなければいかぬ。あれが短篇の落ちである。あれがあるから畫龍點睛の妙を覺えて

全篇が活動してくるのである。もし是を不贊成といふなら大に議論がしたい。
委細は面語に讓る。花うづはいゝ名だと僕も本屋に教へてやつた。
本屋へは川下氏の稿さしかへの義通知可致か否や　草々

十月十一日　　夏目金之助

白楊先生

一二二

十月十二日　午後十一時—十二時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ（四〇）

拜啓昨日は失敬本日學校でモリスに聞いて見た所二十八日の喜多の能を見に行くから升（原）を一つ（上等な所。あまり舞臺が鼻の先にない所を）とつてもらひたいと云ふ事であります。どうか願ひます。夫から時間は午前八時頃から五時位迄ですか。喜多の番地はどこでしたか鳥渡教へて下さい。今度の木曜にも入らつしやいな。四方太も來るかも知れない。小生元來のん氣屋にて大勢寄つて勝手な熱を吹いてるのを聞くのが大好物です。

森田が千鳥をよんで感心して來ました。森田は一頁五十錢で飜譯をして食つてゐる。シやボテン黨は此味を知らないからシャボテン派なんだらうと云ふてゐます。今日も三人來ました。然し玄關の張札を見て草（原）々歸ります。甚だ結構です。　以上

十月十二日夜　　金生

虛子先生

一二三

十月十三日　午後五時—六時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
牛込區早稲田南町三十番地大澤方片上伸氏へ（三）

拜啓御手紙にて恐縮實は先達から御依賴故漠然と何かかゝねばなるまい位は考へてゐたものゝ。そんな程度のものは外にも大分あるので御手紙がくる迄は明かに責任も感ぜずに打過候。ホトトギス、藝苑。東亞の光。も同樣の體に候。まあ出來たら。可成かゝう位に候。然る所君の方の雜誌は大分大仕懸故かけるかも知れない位では御困りになる事と存じそこで大に閉口致し候。實は近來色々多忙に相成不得已木曜の午後三時からを面會日と定めたる位の有樣。よしかくとしても

やつと來年迄に一つ位と存候。到底三つも四つも出來る程のひまはなからうかと存候其一つも氣が向かなければ出來ぬ事と相成るべく御依賴の方も御困りなら引き受ける方も困る事に候。まあ精々書いて見る事にして出來たら上げる事に致しませう。尤もホトヽギスは從來の關係ありて此方は斷はりかね候故。ことによると早稻田へ出なくてもホトヽギスへは出るかも知れず。夫から帝國文學も少々恐れて居り候。かうかち合つては小生も迷惑君の方も御迷惑ではありますまいか。一寸伺ひます。

本月の早稻田文學の彙報中小生の事を御書き被下たのは君だらうと思ひます。あれは今迄出た日本の批評のうちで尤も精細な眞面目な系統のある。勞力の入つたものと思ひます。小生の作の樣なものに對してあれ丈の勞力を費やされた好意を深く感謝し度と思ひます。是はあながち小生を賞めて下さつたから難有く思ふのではありません。あれが批評家の態度として堂々として然も落ち付いて居て奧床しい上に餘程ヒマが懸つて居るから、そんな事を今の世に敢てする批評家の手にかゝつた小生を名譽と思ふから感謝の意を表する譯であります。今の世の批評といふものは通りがゝりに「アテコスリ」をちよつと殘して逃げて行く樣なのが多いぢやありませんか。作物に立派なのがない所爲かも知れんが批評のやり方もわるいです。あれぢや雙方進みつこない。

先は右御返事旁御禮迄　草々頓首

十月十四日原

片上伸樣　　夏目金之助

一二四

十月十四日　午前十一時—十二時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ（二）

大に議論を上下したいが手紙を何本も書かねばならんのと校正を無暗にしなければならんのと夫から色々な用事があるのでどうも長い手紙がかけない。いづれ今度の木曜日にでも來たら大に議論をやる。

今夜服部が用事で來たから川下君承知の旨を話して置いた。服部の野郎は「猫」をやつてくれと本郷座の連中にたのんだのださうだ。人間も是程營利的に傾けば世話はない。芝居でやりたければさせてはやるが役者に賴んでしてもらふ抔といふ了見がどうして出來るだらう。たのむ場合には役者の方が作者の方より上手な場合だ。今の役者輩に猫がわかるものは一人も居やしない。君ともかくも正月迄に今一篇かき添へ玉へ　草々以上

十月十四原日夜

森田白楊様　　なつめ金

一二五

十月十五日　（以下不明）　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ（四一）

喜多の番組難有候。一寸この文壇五名家といふ奴を御覽なさい。僕の鼻が曲がつてゐるから妙だ。鼻の穴の片ッ方が餘計に見えてゐる。是で文學者もすさまじいものだ。然し他の四名家も文學者らしくもありませんね。中には泥棒の様なものもゐる　草々

十月十五日

高濱先生　　金

一二六

十月十五日　午後十一時—十二時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
芝區琴平町二番地朝陽館野間眞綱へ（四六）［はがき］

久しく御無沙汰をした。此間フロックコートを誂へたから出來たら着て見せに行かうと思ふ。野村も冬服を作つた。僕の古いフロックは中川にやつた。高田文學士が草枕を評してくれた。近頃の批評には隨分アヤシイのがある中學生位ナ青二才ガ生意氣ヲ云ッテ六號活字ニスル。ヨムトエラサウダガ逢フト根ッカラ下ラナイ。木曜ニ遊ビニキ玉ヘ。高田ニ御禮ヲ云フテクレ玉ヘ

一二七

十月十六日　午後五時—六時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
鹿兒島市第七高等學校寄宿舍行德二郎氏へ（一）

拜啓其後は御無音如何なされし事かと存居候處先日の御手紙にて鹿兒嶋の高等學校へ御入學のよし承はり安心致し候

カゴシマは何かにつけて不便なるべけれども久留米に近いから便利かと存候時候を厭ひ御勉強專一と存候

當方別段の變りもなく無事に暮らし候

筆は大分大きくなり只今は小學の一年生に候。筆のあとに娘が三人生れ候。皆女にて厄介なる事に候。御令兄には時々御面會申候。

君は醫學をやる事と存候多分福岡大學へ入學の事と存候。段々世の中に住みなれると愚な事許り笑ふにも笑はれず怒るにも怒られぬ愚な事ばかりに候。其なかに住んで居る自分がさう思ふ位だから後世から見れば嘸馬鹿氣て居るだらうと思ひ候。是だから後世に名の殘る人は滅多にない者だと合點が行きます。

高等學校生抔といふと日本では教育のある部類の人であるが、あのうちで未來に名の傳はる樣な人は何人あるか、考へて見ると大抵は平凡で愚劣なものに相違ないといふ事がすぐに分る。こに氣がつけば世の中に恐ろしい人は滅多に居ない事になる。カゴ島の果でも東京の眞中でも同じ事である。天下は太平である。ユックリと鷹揚に勉強してエライ者になつて、名前を後世に御殘しなさい　以上

十月十五日

夏目金之助

行德二郎様

一二八

十月十七日　午後零時—一時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
麴町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ（四二）

拜啓喜多の番づけを難有う存じます。早速モリスにやりませう。先達て御話しのあつた二百十日に關する拙翰をホトヽギスへ掲載の義は承知致しましたと申しましたが、少し見合せて下さい。近々「現代の青年に告ぐ」と云ふ文章をかくか又は其主意を小説にしたいと思ひます。すると其前にあの手紙は出して貰はない方がよい。どうでせう。あの主意をあなたが布衍して、さうしてあなたの意見も加へてあなたの文章とかきかへてホトヽギスへ出して下さつては。あの手紙のうちで困るのは現代の青年はカラ駄目だと云ふ事と「普通の小説家なら……」と云ふ自贊的の語である。自分が小説をかいて、人の小説を自分のに比べて攻擊するのはいやな心持ちだ。夫から現代の青年に告ぐと云ふ文章中には大に青年を奮發させる事をかくのだから「カラ駄目」ぢやちと矛盾してしまひます

まづ用事丈にして置きます

森田流の人には當分シャボテン主義は分りません矢張りロシや主義で進歩するがよからうと思ひます

十六日

高濱様

金

一二九

十月十八日　午前八時―九時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ（四三）

拜啓手紙は國民新聞へ御出しのよしちつとも構ひません。出したら出したで小説でも論文でも出來ますから決して御心配には及びません。本當は現代の青年の一部のものにあの手紙を見せてやりたいのですから大に結構であります。今日松根が來ました。今度の日曜に散歩をする約束をしました。早稲田から正月といふ注文が來ましたが是は延ばす事に仕つてホトヽギスへ何かかいて見ませう尤も他にも約束もあるがどうかします。尤もホトヽギスへ出來なければ外へも出來ないのですから御勘辨なさい　左様なら

十月十六夜

虚子大人

座下

金

一三〇

十月二十日　午後三時―四時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
芝區琴平町二番地朝陽館野間眞綱へ（四七）

拜啓伊香保の紅葉を貰つて面白いから机の上へのせて置いたら風がさらつて行つて仕舞つた。どこをたづねてもない。

近頃は久しく逢はない。昨日の面會日には四五人來て十時頃迄文學談をやつて愉快であつた。近來世の中に住んで居るのが小便壺のなかに浮いて居る樣な氣がする。周圍が小便だから自分も嘸臭い事だらうと思ふ。

高等學校抔へ出ても尤も簡單で尤も純潔なるべき書生が大分アートフルである。眞正に書生らしいものは十分一位だらう。こんなものに敎へるのだからどうでも構はないと云ふ氣で居る。昔し小便壺のうちに居る事に氣がつかなかつた時はもつと熱心であつた。天下の人が戯れて居るのに自分丈眞面目で居るのは醉漢の中に窮屈にかしこまつてゐる樣なものだ。未來の日本を作る青

年が自己の責任もエライ事も何も知らずにワー〳〵して居るのは天子様の爲めに御氣の毒である。
今日曜には遠足をする。近日猫の中卷と鶉籠と夫から今少しすると文學論が出來る。出來たら一部あげる。今の青年共は猫をよんで生意氣になる許りだ。猫さへ解しかねるものが品格とか人柄とかいふ事が分り樣筈がない。困つたものだ。　左樣なら

十月十九日　　金之助

眞綱　樣

一三一

十月二十日　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
芝區高輪車町四十八番地皆川正禧へ（一〇）

拜啓久しく御目にかゝらない先日野間が手紙をよこして君の今度の家はいゝ所だ是非行つて見ろとあつた。是非行きたいが何だか忙がしくて行かれない。近頃は世の中に住んで居るのが夢の中に住んでゐる樣な氣がする。どこを見ても眞面目なものが一つもない。悉く幻影と一般タワイないものである。こんな世界に住んで眞面目に苦しい思ひをして暮らすのは馬鹿氣てゐる。眞面目になり得る爲めには他人があまり滑稽的である。
僕明治大學をやめやうと思ふ。先日高田が來て報知新聞へ何かかいてくれと云つたから明治大學をやめて新聞屋にならうか知らん國民新聞でも讀賣でも依賴されてゐる。明治大學は土曜の四時間であるから、土曜を四時間つぶして何かかいてさうして夫が同じ位の收入になれば新聞の方が色々な便宜がある樣に思ふ。
明日は大森の方へ遠足をするが東洋城といふ青年と一所だから君のうちへは寄れない。此東洋城君なるものは頗る眞面目な青年である。青年は眞面目がいゝ。僕の樣になると眞面目になりたくてもとてもなれない。眞面目になりかける瞬間に世の中がぶち壞はしてくれる。難有くも、苦しくも、恐ろしくもない。世の中は泣くにはあまり滑稽である。笑ふにはあまり醜惡である。
あまり御無沙汰をしたから手紙を一寸あげる。土曜の晩だからこんな下らない手紙をかくひまがある。來客は皆木曜にまとめて仕舞つた。壹週間丸つぶしにして人の爲めに應接をしてやつたつて自分が疲勞する許りである。　草々

十月二十日　　夏目金之助

皆川正禧　樣

一三二

十月二十一日　午前十一時—十二時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ（二二）

拜啓君の所から白い狀袋の長い手紙が來ないと森田白楊なるものが死んで仕舞つたかの感がある。今日曜早起きるや否や白狀があつたので矢つ張り生きてるなと思つた。

草枕の評は多大の興味を以て拜讀した面白かつた。草枕を評すると云ふ點より君がどんな考を以て書をよみつゝあるかゞ分るからである。あの理窟を云ふ所が面白い。普通の新聞屋抔のいふ評は何を云ふのだか分らない。さすがに森田先生丈あつて何か云ふ事があるから感服だ。一體君は評論をして理窟を云ふ方が筋の立つた事を云ふ。又譯の分つた事を云ふ。だから創作が其主義を應用する樣に出來てるかと思ふと、さう旨く行つてゐない。君は不平かも知れないが慥かに行つてゐませんよ。

君のいつもよこす手紙は何だかどこかに愚癡つぽい所があつたが今度のはサラ〳〵したものだ。甚だ我意を得てゐる。愚癡を竝べても愚癡に拘泥してゐない。滔々と愚癡が出て來て平氣である。是が甚だ愉快だ。凡て愚癡でも何でも拘泥した奴は厭味だね。いくらスキのない服裝でも本人が夫に拘泥してゐると厭味が出る。凝つた身裝をしてさうして凝つた所を忘れてゐるのがいゝぢやないか。今度の手紙は是に近い。君の創作もどうかこの格で行きたいと思ふ。今度の手紙の結末にある「是から洗湯に參らうかと存候敬具」抔は振つたものだ。あれを稱してサボテン趣味と名づけるのである。サボテン趣味と云へば君がラウムレーレからサボテン趣味を呪詛する事を虛子に報知したら、虛子大に激して——大學を卒業して机上で人生觀を作つてゐるからサボテン趣味が分らないのだ抔と氣燄を吐いて來た。さうして森田君にサボテン趣味を說いてくれといふから僕は森田は當分サボテン趣味は分らない、矢つ張り露西亞主義でいゝのであるとかいてやつた。すると今度は虛子先生の返事に「實は私も社會學や心理學方面が嫌なのではない、出來れば此方へも興味を持ちたい、其代り森田君もサボテン趣味を研究して貰ひたい」とあつた。

木曜日にはサボテン黨の首領は鼓の稽古日だとか云つて來なかつた。呑氣なものである。其代り中川のヨ太公。鈴木の三重吉。坂本の四方太、寺田の寒月諸先生の上に東洋城といふ法學士が來た。此東洋城といふのは昔し僕が松山で敎へた生徒で僕のうちへくると先生の俳句はカラ駄目だ、時代後れだと攻擊をする俳諧師である。先達て來て玄關に赤い紙で面會日抔を張り出すのは甚だ不快な感がある。「僕の爲めに遊びにくる日を別にこしらへて下さい」と駄々つ子見た樣な事を云ふから、そんな事を云はないで木曜に來て御覽といつたからとう〳〵我を折つて來たのである。又松茸飯を食はせてやつた。今日此東洋城と大森の方へ遠足をするのである。」

僕は明治大學の文學部の方を御免蒙る樣に辭表を提出して置いた。君を後釜に据ゑてやりたい

が内海月杖翁が承知しまいから駄目だ。文學部の方をやめると米櫃に影響する。夫から色々な所へ微震を起す。妙な事だ。

近頃は小便壺の中に浮いてゐる樣な氣がする。小生も臭いが傍から見ても臭いだらう。去りとて小便壺から飛び出す程の必要も認めない。昨日ある人に手紙をつかはして曰く「世の中は泣くにはあまり滑稽である、笑ふにはあまり暗黑である」「今の世で眞面目になる事は到底不可能だ。眞面目になりかけると世の中がすぐぶち壞してくれる」

こゝに於て僕はサボテン黨でも露西亞黨でもない。猫黨にして滑稽的＋豆腐屋主義と相成る。サボテンからは藝術的でないと云はれ露西亞黨からは深刻でないと云はれて、小便壺のなかでアブアブしてゐる。是からさき何になるか本人にも判然しない。要するに周圍の狀況で色々になるのが自然だらう。西洋人の名前抔を擔いで此人の樣なものをかゝう抔といふのは抑も不自然の甚しきものである。君オイランの寫眞を見てアタイもこんな顏にならうたつてなれやしないぢやないか。今の文學者は皆此アタイ連である。僕の事を英國趣味だ抔といふものがある。糞でも食ふがいゝ。苟しくも天地の間に一個の漱石が漱石として存在する間は漱石は遂に漱石にして別人とはなれません。英國趣味があるなら、漱石が英人に似てゐるのである。英人が漱石に似てゐるのである。

君英譯をやるつてそりや少々無理だよ。英文で立たうと思ふなら今から五六年其方の丁稚奉公

でもしなけれ[原]りやいけない。それより英文を日本に譯す方がいゝ。尤も何を譯していゝか僕にも一寸わかりかねる。

もうかくのが厭になつたから是にて擱筆

十月二十一日　夏目金之助

森田白楊樣

一三三

十月二十二日　午前八時—九時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ（二三）

君の夜中にかいた手紙を見てゐると東洋城が誘ひに來たから手紙は洋服のカクシへ入れて品川の先の鮫州[原]の川崎屋といふ料理屋で飯をくふ時さき棄てゝしかもさいたくず[原]は未だにカクシの中に丸めてある。

余は滿腔の同情を以てあの手紙をよみ滿腹の同情を以てサキ棄てた。あの手紙を見たものは手紙の宛名にかいてある夏目金之助丈である。君の目的は達せられて目的以外の事は決して起る氣

遣はない。安心して余の同情を受けられん事を希望する。

余の知る人のうちに二三君と同様の境遇の人あり。否境遇の人なりときく。去れど彼等は皆相應に成功の人なり。君も相應に成功の緒を得ば此不幸を忘るゝを得んか。余は君が此一事を余に打ち明けたるを深く喜ぶ。余を夫程重く見てくれた君の眞心をよろこぶ。同時に此一事を余に打ち明けねばならぬ程君の心を苦しめたる源因者（もしあらば）を呪ふ。同時に此一事を余に打明くべく餘義なくさるゝ程君の神經の衰弱せるを悲しむ。男子堂々たり。這般の事豈君が風月の天地を懊惱するに足らんや。君が生涯は是からである。功業は百歳の後に價値が定まる。百年の後誰か此一事を以て君が煩とする者ぞ。君若し大業をなさば此一事却つて君が爲めに一光彩を反照し來らん。只眼前に汲々たるが故に進む能はず。此の如きは博士にならざるを苦にし、教授にならざるを苦にすると一般なり。百年の後百の博士は土と化し千の教授も泥と變ずべし。余は吾文を以て百代の後に傳へんと欲するの野心家なり。近所合壁と喧嘩をするは彼等を眼中に置かねばなり。彼等を眼中に置けばもつと愼んで評判をよくする事を工夫すべし。余はその位な事がわからぬ愚人にあらず。只一年二年若しくは十年二十年の評判や狂名や惡評は毫も厭はざるなり。如何となれば余は尤も光輝ある未來を想像しつゝあればなり。彼等を眼中に置く程の小心者にはあらざるなり。彼等に余が本體を示す程の愚物にはあらざるなり。彼等が正體を見あらはし得る程な淺薄なものにあらざる也。余は隣り近所の賞贊を求めず。天下の信仰を求む。天下の信仰を求めず。後世の崇拜を期す。此希望あるとき余は始めて余の偉大なるを感ず。君も余と同じ人なり。君の偉大なるを切實に感じ得るとき這般の因果は紅爐上の雪と消え去るべし。勉旃々々

十月二十一日夜　十一時池上より歸りて　夏目金之助

森田白楊様

〔以下餘白に朱書〕

人若し向上の信を抱いて事をなす時貴キ事神人ヲ超越シテ蓋天蓋地に自我ヲ觀ズ。天子様ノ御威光デモ是許リハドウモ出來ン。漱石ハ喧嘩ヲスル度に此域に出入ス。白楊先生ハ如何

一三四

十月二十三日　午後二時—三時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より牛込區早稲田鶴巻町一番地坂元（當時白仁）三郎へ（三）

拜啓妹尾福松氏件につき色々御手數を煩はし難有候今日の御手紙にて同人も希望通り愈教員免

狀下附の運に至り定めし滿足の事と存候
御序の節御令兄へよろしく御禮願上候。小生も是にて同人の爲め安心致候是から早速通信して
やらうと存候
先達中から餘り來客が多いので木曜日の午後三時からを面會日に定め申候すると木曜には色々
な人がやつて來て愉快に候クラブの觀有之候、時々御出俥(原)の上模樣を御覽になつては如何　以上

十月二十二日　　夏目金之助

白仁三郎樣

一三五

十月二十六日　午後三時—四時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
本郷區彌生町三番地小林第一支店鈴木三重吉へ（一枚）〔封筒表左側下に「第一信」とあり〕

君の夜中にかいた手紙は今朝十一時頃よんだ。寺田も四方太もまあ御推察の通の人物でせう。
松根はアレデ可愛らしい男ですよ。さうして貴族種(原)だから上品な所がある。然しアタマは餘りよ
くない。さうして直むきになる。そこで四方太と逢はない。僕は何とも思はない。あれがハイカ
ラならとくにエラクなつて居る。伯爵ノ伯父や叔母や、三井が親類でさうして三十圓の月給でキ
ユキユしてゐるから妙だ。さうしてあの男は鷹揚である。人のうちへ來て坐り込んで飯時が來て
飯を食ふに、恰も正當の事であるかの如き顏をして食ふ。「今日も時刻をハヅシテ御馳走ニナル」
とか「どうも難有う御座います」とか云つた事がない。自分のうちで飯をくつた樣にしてゐるか
らいゝ。
君は森田の事丈は評して來ない。恐らく君に氣に入らんのだらう。あの男は松根と正反對であ
る。一擧一動人の批判を恐れてゐる。僕は可成あの男を反對にしやう〳〵と力めてゐる。近頃は
漸くの事あれ丈にした。それでもまだあんなである。然るにあゝなる迄には深い源因がある。そ
れで始めて逢つた人からは妙だが、僕からはあれが極めて自然であつて、而も大に可愛さうであ
る。僕が森田をあんなにした責任は勿論ない。然しあれを少しでももつと鷹揚に無邪氣にして幸
福にしてやりたいとのみ考へてゐる。
君をしかるつて、夫で澤山だ。そんなにほめる程の事もないが叱られる事もなからう。
僕の教訓なんて、飛んでもない事だ。僕は人の教訓になる樣な行をしては居らん。僕の行爲の
三分二は皆方便的な事で他人から見れば氣違的である。それで澤山なのである。現在狀態がつゞ
けば氣遣(原)である。死んでから人が氣違ときめて仕舞つたつて少しも恥とも何とも思はない。現在
狀態が變化すれば此狂態もやめるかも知れぬ。さうしたら死んでから君子と云はれるかも知れん。

つまり一人の人間がどうでもなる所が自分ながら愉快で人には分らないからいゝ。氣違にも、君子にも、學者にも一日のうちに是より以上の變化もして見せる。人が學者といふも、氣違といふも、君子と云ふも、月給さへ渡つてゐればちつとも差支ない。だから僕は僕一人の生活をやつてゐるので人に手本を示してゐるのではない。近頃の僕の所作を眞似られちや大變だ。　草々

十月二十六日

夏目金之助

鈴木三重吉様

一三六

十月二十六日　（時間不明）　本郷區駒込千駄木町五十七番地より

本郷區彌生町三番地小林第一支店鈴木三重吉へ　（一七）　〔封筒表中央下に「第二信」とあり〕

只一つ君に教訓したき事がある。是は僕から教へてもらつて決して損のない事である。

僕は小供のうちから青年になる迄世の中は結構なものと思つてゐた。旨いものが食へると思つてゐた。綺麗な着物がきられると思つてゐた。詩的に生活が出來てうつくしい細君がもてゝ。うつくしい家庭が〔出〕來ると思つてゐた。

もし出來なければどうかして得たいと思つてゐた。換言すれば是等の反對を出來る丈避け樣としてゐた。然る所世の中に居るうちはどこをどう避けてもそんな所はない。世の中は自己の想像とは全く正反對の現象でうづまつてゐる。

そこで吾人の世に立つ所はキタナイ者でも、不愉快なものでも、イやなものでも一切避けぬ否進んで其内へ飛び込まなければ何にも出來ぬといふ事である。

只きれいにうつくしく暮らす卽ち詩人的にくらすといふ事は生活の意義の何分一か知らぬが矢張り極めて僅小な部分かと思ふ。で草枕の樣な主人公ではいけない。あれもいゝが矢張り今の世界に生存して自分のよい所を通さうとするにはどうしてもイブセン流に出なくてはいけない。

此點からいふと單に美的な文字は昔の學者が冷評した如く閑文字に歸着する。俳句趣味は此閑文字の中に逍遙して喜んで居る。然し大なる世の中はかゝる小天地に寐ころんで居る樣では到底動かせない。然も大に動かさゞるべからざる敵が前後左右にある。苟も文學を以て生命とするものならば單に美といふ丈では滿足が出來ない。丁度維新の當士（時）勤王家が困苦をなめた樣な了見にならなくては駄目だらうと思ふ。間違つたら神經衰弱でも氣違でも入牢でも何でもする了見でなくては文學者になれまいと思ふ。文學者はノンキに、超然と、ウツクシがつて世間と相遠かる樣な小天地ばかりに居ればそれぎりだが大きな世界に出れば只愉快を得る爲めだ抔とは云ふて居られぬ進んで苦痛を求める爲めでなくてはなるまいと思ふ。

君の趣味から云ふとオイラン憂ひ式でつまり。自分のウックシイと思ふ事ばかりかいて、それで文學者だと澄まして居る樣になりはせぬかと思ふ。現實世界は無論さうはゆかぬ。文學世界も亦さう許りではゆくまい。かの俳句連虚子でも四方太でも此點に於ては丸で別世界の人間である。あんなの許りが文學者ではつまらない。といふて普通の小説家はあの通りである。僕は一面に於て俳諧的文學に出入すると同時に一面に於て死ぬか生きるか、命のやりとりをする樣な維新の志士の如き烈しい精神で文學をやつて見たい。それでないと何だか難をすてゝ易につき劇を厭ふて閑に走る所謂腰拔文學者の樣な氣がしてならん

破戒にとるべき所はないが只此點に於テ他をぬく事數等であると思ふ。然し破戒ハ未ダシ。三重吉先生破戒以上の作ヲドン〳〵出シ玉ヘ　以上

十月二十六日

夏目金之助

鈴木三重吉樣

一三七

十月二十九日　午後四時—五時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より

拜啓先日來日曜文壇に何か執筆を御依頼の所何かと存じ候へど小生近刊の文學論に自序を認め候。是は二十四行二十四字詰めにて十二三枚のものに候が、もしそれにてよろしければ此次の附錄に差し上げてもよろしく候。少しながすぎるならばやめてもよろしく候。御望みならば下女に持たせて上げます。但し一度に出して下さらなくては困ります夫から表題は近刊「文學論」序と云ふのです　草々

十月二十一日

夏目金之助

薄井樣

本郷區森川町四番地蓋平館薄井秀一氏へ　(一)

一三八

十月二十九日　本郷區駒込千駄木町五十七番地より

本郷區森川町四番地蓋平館薄井秀一氏へ　(二)

御返事拜見原稿如貴意御送申候表題は

文學論序（近刊）　夏目漱石

位に願ひ候。右用事迄餘は拜眉萬縷

十月二十九日　　夏目金之助

薄井秀一様

一三九

十一月三日　午前十一時―十二時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
本郷區駒込曙町十一番地大谷正信氏へ　（五）

拜啓先夜は御立寄被下候處何の風情も無之不本意千萬に存候偖其翌日は御親父様わざ〳〵見事なる菊花御持贈被下意外の幸福早速瓶中に插み朝夕眺入居候何卒御老人へよろしく御鳳聲願度候先は右御禮迄　草々以上

十〔一〕月二日　　夏目金之助

天長節の前夜

大谷繞石様

一四〇

十一月六日　午後六時―七時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ　（二四）

二十一圓なにがし御落手の由結構に候。そこで手紙をかく元氣が出た所猶更結構に候。君が手紙をよこさないか顔を出さないと何だか存在を疑ふ様になる外の人にはそんな心配がない。是は君が氣まぐれに浦和の安宿り抔へ行つて考へ込む病氣がある所爲だらうと思ふ。生田先生が金港堂へ這入つたので何か書いてくれといふて來た。二十五圓だから君より三圓なにがし多い事になる。先生の來た時は親類のものがある相談に來てゐた最中でしかも其上に今一人來訪中であつた。其來訪中の御客は驚ろいて逃げて歸つた

アンクワを讀んださうだが僕もよんだ。通篇西洋臭い。君どう思ふ。あれは燒き直しぢやないか。然し田園の光景が面白かつた。夫から田舍言葉のせゐか厭味がなくよまれた。僕は初めて小說をかいてあれ丈出來れば大成功の方と思ふ。

文章一口談は例の東洋城が池上の山門で藝者を見ながら筆記したもの何だか怪しいものだ。不折のイムプレッショニストの論は亂暴なものだ。大將曰く感興そのものをかくからイムプレ

ツショニストだと無學もこゝに至つて極まる。本人畫工ぢやないか。而して印象派なる名目の由來を知らないで馬鹿な事をいふ。

文學論の序は文章を見てもらふのでも何でもない。あの通りの事を讀んでヘエーと云つてもらへばいゝ。讀賣へのせる必要もなかつた。何かくれといふからやつた。

生田先生の戀愛文學が癪に障つたと思つて片上天絃が早稻田文學へかいた。夫を白鳥が贊成した。白鳥はチョッカイを出す事を家業にしてゐる。云ふ事は二三行だ。夫で人を馬鹿にして自分がエラサウな事ばかり云ふ。厄介な男だ。

正月には何か純人情的卽ちシャボテン式ならざる物をかきたいと思ふ。　以上

十一月六日　　夏目金

白楊先生

僕のひげについての抗議は少々困る實は時々ほめる人があるがまだとれと命じた人はない。これあるは君より始まる。

僕フロック・コートを五十四圓で新調したら、急に演舌がやつて見度なつた。

天長節に一着の上麻布迄行つたらもう演舌はしないでもよくなつた

一四一

十一月七日　午後四時—五時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ（二五）

君が手紙をかく僕が手紙をかく而して互に連發すれば手紙で疲弊して仕舞ふ。そこで今度は一寸短かい奴をかく。

サボテンの元勳四方太がアン火を賞めたから面白い。大方自分に出來ないからだらう。天絃は比較的眞面目な人だ。僕は長江先生も天絃先生も兩方知つてるから兩方へ贊成する。尤もあんなに議論する程のものはないね。田舍へ行くのもいゝ。然し敗北して行くのは御免だね。御釋迦さんの樣に自ら王位や美人をすてゝ行くなら贊成だ。居たゝまらないで、人からつゝきやられた抔といふのは一生の恥辱だ。人は何といふてもよい自分がさうでなければ。然し自分でさうしては一分が立たない。矢張り東京にゐるがいゝ。東京にゐてみんなを眼下に見下すがいゝ。そんなに君よりえらい人が澤山ゐるものぢやないよ。飯だつて三度食へれば夫で澤山だ。

子を生ませたつていゝさ。僕なんか何人も製造して嫁にやるのに窮してゐる。然も細君にさうぼれてる譯でもないんだから出來て見ると少々汗顏の至りだ。大方向でもさうだらう。

泣く小説を御注文だが僕に出來ればいゝ。とにかく早く取りかゝりたいものだが中々いそがしい

是から一風呂這入つてくる。（藝苑まだ見ず）

十一月七日

金之助

白楊育兒院長殿

一四二

十一月九日 午後六時―七時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ（四四）

昨日は御出かと思つて居たら東洋城の注進で顔がはれたと云ふ譯で髮結床も油斷のならないものと氣がつきました。昨日は大分大勢來ましたしめて十三四人です。東洋城と三重吉が大に論じてゐました。紅綠のアンクワを四方太がほめた。森田白楊は散々わるく云ふた。あのヂヾィは僕も嫌だ。通篇西洋臭い。燒直し然としてゐる。然し田舍の趣味がある所が面白いと思ひます。

文章談はほんの一口でつまらんものです。

正月には非人情の反對卽ち純人情的のものがかきたいが出來るか、出來損ふか、又は出來上らないか分らない。文債が多くて方々から尻が來て閉口です。

坊ちやんは依然として廣告されてゐま〔す〕ね。どうか正月分は（もし出來たら）此醜態を免かれたいと思ふ。

僕今度は新體詩の妙な奴を作らうと思ふ。

文界は依然として芋を揉んでゐる。其なかに混ち（原）て奮鬪するのは愉快ですね。皮がむけて肉がたゞれても愉快だ。僕もし文壇を退けば西都へ行つて大學で濟まして講義をしてゐます。然し折角生れた甲斐には東京で花々しく打死をしたいですね。

吉原の酉の市なんか僕も見たかつた。

二三日漫然とあるきたい。手紙をかく丈でも隨分骨が折れる　以上

十一月九日

金

虛子先生

一四三

十一月九日　午後六時―七時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
本郷區森川町一番地小吉館小宮豐隆へ（四）

今日は長い手紙をかゝなければならん日で四五本かくと一寸一仕事だが返事をよこせといふから上げる。

昨日は客に接する事十三四人一寸驚ろいた。然し知つた人があゝ云ふ風に寄つてみんなが遠慮なく話しをするのを聞いてゐる程な愉快はない。僕は木曜日を集會日と定めたのをいゝ事と思ふ。君は一人でだまつてゐる。だまつてゐても、しやべつても同じ事だが、心に窮屈な所があつてはつまらない。平氣にならなければいけない。うちへ來る人は皆恐ろしい人ぢやない。君の方でだまつてるから口を利かないのだ。二三度顔を合せればすぐ話が出來る。實は君の樣なのが昨日の客中にもあるのだが夫が構はずに話しをしてゐたから面白い。君も話せば面白くなるのである。中川といふ人はやさしい人であるが三重吉君は御仰の通中々猛烈な所がある。あの兩人は親友である。色の白い顔は東洋城といふ俳句家である。あれもあれぎりの好人物である。せビロ連は尤も大人しい連中でちつとも氣兼抔をする男ぢやない。君かりに俳句の會へでも出ると假定し玉へ知らない人は幾人でも居る。僕も昔は內氣で大に恥づかしがつたものだ。今でもある人はさう思つてゐる。所が大違ひ外部こそ同じだが內心はどんな人の前でも何とも思はない。學校抔で氣に喰はない敎師抔が居ればフンと云つて鼻であしらつてゐる。夫で澤山なのだよ。世の中にエライ

人が無暗に多いと思ふから恥づかしくなつたり。極りがわるくなるので。自分の心が高雅であると下等な事をする物などは自然と眼下に見えるから些つとも憶（原）する必要が起らないものさ。

こんな氣燄を吐くのも木曜日に君を話させ樣と思ふからさ。又來る時は大に辯じ玉へ忙しいから是で御免を蒙る　以上

十一月九日

夏目金之助

小宮豐隆樣

一四四

十一月十一日　午前八時―九時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
麴町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ（四五）

拜啓昨日一寸伺ふのを忘れましたがね小生の原稿は十二月二十日頃迄でいゝでせうか、そこの所を一寸確めて置きたい實は色々用事があつてね　早くは出來さうもないです。

生田長江といふ人が四方太さんの所へ行つたら先生大氣燄で漱石も一夜をかいてゐるうちはよかつたが近頃段々墮落すると云つたさうだ。四方太先生はこんな元氣はない人だと思つてゐた。

えらい事になりました。僕は秋晴や秋曇をかいて満足してゐられる樣になりたい。其方がどの位個人として幸福か知れない。僕がかくのは冗談にかくんぢやない。まづくても下手でも已を得ずかくのである。冗談なら文章をかゝずに教師丈でひまがあれば遊んであるいてゐる。

小生今後の傾向は先づ以て四方太先生の墮落的傾向であります。甚だ厄介ですな。小生が好んで墮落するんぢやない。世の中が小生を強ひて墮落せしむるのであるか。　恐惶謹言

十一月十一日　　金

虛子先生

左千夫の手紙に云つてゐる事は僕にわからない。四方太の駄洒落を攻擊してゐる所は小生は駄洒落とは認めない。僕はあすこへ應用して貰ふ積りで文章談をしたのではない。

あれが駄洒落なら大抵のものは駄洒落だ。然し秋晴や秋曇は墮落的傾向を帶びないから僕には一向感じがない。何をかいたのか分らない。あの儘白紙を代りにしても同じ事だ。四方太がきいたら定めし怒る事だらう

一四五

十一月十一日　使ひ持歸　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
麴町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ（四六）

今日は早朝から文學論の原稿を見てゐます中川といふ人に依賴した處先生頗る名文をかくものだから少々降參をして愚癡たら〳〵讀んでゐます。

今四十枚ばかり見た所へ赤い冬瓜の樣なものが臺所の方から來て驚ろきました夫に長い手紙があるので愈驚ろきました。赤冬瓜の事は一二行であとは自我說文學說だから愈以て驚ろきました。御意見は面白く拜見しました。大分御謙遜の樣ですがあれはいけません。然し文章について大意見があるとは甚だ面白い是非伺ひ度と思ひます。

アン火は感じがわるいですね。佛蘭西あたりのいか樣ものを脊負ひ込んだのでせう。

四方太は白紙文學、僕は墮落文學、君はサボテン文學三重吉はオンラン（原）憂ひ式夫々勝手にやればいゝのです。夫で逢へば滅茶に議論をして喧嘩をすればいゝと思ふ。所が四方太先生は議論をしませんよ。だからいやだ。

天下が僕の文を待つは甚だ愉快な御愛嬌で難有く待たれて置いて大に驚ろかす積りで奮發してかきませう。東洋城のオバサンが二百十日をほめたさうだから面白い。僕は人の攻擊をいくらで

もさくが大概採用しない事にしました。其代りほめた所は何でも採用すると云ふ憲法です。
何だかムヅ〳〵していけません。學校なんどへ出るのが惜しくつてたまらない。やりたい事が多くて困る。僕は十年計畫で敵を斃す積りだつたが近來是程短氣な事はないと思つて百年計畫にあらためました。百年計畫なら大丈夫誰が出て來ても負けません。
木曜に入らつしやい
ハムは大好物だから大に喜んで食ひます
二十日迄にかきます

十一月十一日

夏目金之助

虛子先生

一四六

十一月十二日 午後三時—四時 木郷區駒込千駄木町五十七番地より
下谷區谷中清水町五番地橋口清氏へ（九）

拜啓先日は御令兄がわざ〳〵御出被下た處生憎親類のものがある用事で名古屋から來てゐた所へ又々外の來客があつてすぐ御歸りで甚だ失禮しました。どうか又御出下さい。
昨夜服部が猫の中篇の見本を持つて來ました。始めて體裁を見ました。今度の表紙の模樣は上卷のより上出來と思ひます。あの左右にある朱字は無難に出來て古い雅味がある。（上卷の金字は惡口で失禮だが無暗にギザ〳〵して印とは思へない。）總體が淋しいが落ち付いてゐると思ひます。扉の朱字も上卷に比すれば數等よいと思ひます。ワクの中にうまく嵌つてゐる樣に思はれます。
鶏籠の三枚の扉は先達持つて來ましたが何れも駄目だから歸しました夫からまだ持つて來ません。何をしてゐる事やら
淺井の畫はどうですか。不折は無暗に法螺を吹くから近來繪をたのむのがいやになりました。
先〔は〕御禮まで　草々頓首

十一月十一日夜

夏目金之助

橋口清樣

どうも忙がしくて困ります。こんないゝ天氣に一寸とも出られません。「女學世界」の記者が來たから追ひ歸してやりました

十一月十六日　午後五時—六時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
麹町區飯田町六丁目二十三番地瀧田哲太郎氏へ　（四）

拜啓讀賣新聞文壇擔任の義につき昨夜考へながら寐て仕舞つた。夫故別段名答も出來ぬ
先づ一寸思ひ浮んだ事を云ふと月に六十圓位で各日に一欄もしくは一欄半宛かくのはちと骨が折れる。尤もやつて見んから分らんが多分いやになるだらう。
僕が各日にかけば高等學校か大學をやめる。どつちをやめるかと云へば大學をやめる。
大學は別段難有いとも名譽とも思ふて居らん。今迄三年半に余としては一人前の仕事をして居る。やめたとて職に堪へぬとは云はれない。
高等學校は授業が容易で文學上の研究及び述作の餘裕を作るに便だからやめぬ。のみならず今の所では猶やめぬない。高等學校の教師のあるものは生意氣である。生徒のあるものも生意氣である。ある教師は余がやめればいゝと考へてゐるらしい。余がやめれば、あとから、すぐ運動して這入らうと思ふてゐるものもあるらしい。こんな奴等を增長させては世の爲めにならんからやめぬ。生徒は何の考もなく只輕跳にして生意氣なのである。然しこんな生徒を征伏しないで學校を

出ては余は生涯心持ちがわるい。世の爲めになる事を自分の安きを得る爲めに逃げた樣で甚だ不愉快である。だから高等學校は決してやめぬ。尤もそのうち職員のあるもの若しくは生徒のある「もの」と衝突して事件が急に發展して出るか居るか二つに極める場合が起るかも知れぬ。余はそんな事があればいゝと心待ちに待つてゐる。然しさうして出るなら格別それでなければ出ない。騷動を起して出るにしても僕の代りに這入りたがつて居るものは決して入らせない。
大學をやめれば八百圓の收入の差がある。よし讀賣から八百圓くれるにしても毎日新聞へかく事柄は僕の事業として後世に殘るものではない（後世に殘る殘らんは當人たる僕の力で左右する譯には行かぬ。然し苟も文筆を以て世に立つ以上は其覺悟である）只一日で讀み捨てるものゝ爲めに時間を奪はれるのは大學の授業の爲めに時間を奪はれると大した相違はない。そこで僕は躊躇する。
よし夫でも構はんとする。然し讀賣新聞は基礎の堅い新聞かも知れぬが大學程堅くはない。尤も大學でいつ僕を免職するかも知れぬ。僕の眼中には學生も學長も教授もないから、其位の事はいつ僕の頭の上へふりかゝつて來るかも知れん。然し其懸念を度外視するときは大學の俸給は讀賣よりも比較的固定して居る。竹越氏は政客である。讀賣新聞と終始する人ではなからう。一反の約束である程度の機械的文學欄を引き受けた所で竹越氏と終始して去就する樣に融通の利く文學者ではない。ある時ある場合に僕は一人で立場を失ふ樣になるかも知れぬ。竹越氏が如何に勢

力家でも如何に僕に好意を表しても全然方面の違ふ文學者を生涯引きずつてあるく譯には行かぬ。

又それ丈の覺悟を以て最初から入社するには僕の方で夫丈のモーチーヴがなくてはならん。「僕は教育界に立てぬ人だから、退かなければならん」とか「是非共新聞紙上で自家の說を發表して見たい」とか何かそこには未來の危險を犧牲にする丈の强烈な事情がなくてはならん。所が今の僕には左程の事情がない。

夫からよし以上の理由を念頭に置かずして御依賴に應ずるにした所で到底文欄が僕の當初の所期の樣に行くものではない。讀賣には讀賣に附屬した在來の記者も居る。僕が文欄を擔任すれば僕の近しい人の文字をのみ載せて、在來の人の文字を閑却する樣になるかも知れん。さうすれば苦情が起る。其他色々の事で苦情が持ち上がる。

もし僕の待遇をよくして月給を增して僕の進退を誘ふとすれば僕も少しは動くかも知れん。然し未來の危險は依然として元の通りである。のみならず比較的僕が過分の月給をとれば社中に又不平が起る。島村抱月氏の日々文壇と同樣の事情が起るに極つてゐる。

今度の御依賴に就て尤も僕の心を動かすのは僕が文壇を擔任して、僕のうちへ出入する文士の糊口に窮してゐる人に幾分か餘裕を與へてやりたいと云ふ事である。然し事情を綜合して考へると夫も駄目である。

以上の理由だからしてまづ當分は見合はす方が僕の爲めだらうと思ふ。　早々頓首

十一月十六日　　夏目金之助

瀧田哲太郎樣

一四八

十一月十六日　午後十一時—十二時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より麴町區富士見町四丁目八番地高濱淸氏へ（四七）〔封筒表左側下に「御降り在中」とあり裏に「十一月十六日夜八時半」とあり〕

〔初めの部分切れてなし〕

もうやめます。陳列すると際限がない。仕舞へ行く程ゾンザイになる。一二分に一句位宛出來る。此うちで尤も上等な奴を二つ許りとつて頂戴。

あしたは明治大學がやすみになつて嬉しいから、御降りを一寸作りました

十六日夜　　金

虛子先生

十一月十七日　午前十時—十一時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
府下巣鴨町上駒込三百八十八番地内海方野上豐一郎へ（三）〔はがき〕

巣鴨の奥に御引移りのよし拜承淋しい處がよろし。
冬籠り染井の墓地を控へけり

一五〇

十一月十八日　午後二時—三時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ（二六）

拜啓昨夜は失敬。あの沼津行の事で考へたが一寸分らない。
今朝數藤斧三郎君が來て校長落合氏の方にはよい候補者がないから大學出の方で賴みたいと云ふ
昨夜話した通り太田善男に此事を話した。返事はまだ來ない。

今朝數藤君に富山縣魚津に居る北郷二郎の事も話した。
そこで僕は數藤君に是丈の事は受合つた
君と太田君がもし意があるならば校長落合氏に面會して見る樣に通知して置く事。
校長は神田三崎町の森田館に居る。朝早くか夜ちと遲くでないと居らんさうだ。明後二十日の
午後二時の滊車で歸るさうだ。
北郷へも意志を聞く事を受合つた。
候補者を三人出したのは少々氣が多過ぎるかも知れんが候補者の方でも行くか行かぬか分らん
のだから仕方がない。
昨夜不忍池畔の君の身の上話しをきいた時は只小說的だと思つた。今朝になつて見ると何だか
夢の世界に逍遙した樣な氣がする。
どうしても沼津行は斷然やめぬ方がいゝ一寸校長に逢つて見るがいゝ。
今日ある人に俳書堂で編輯人が入るといふ事をきいたから月給をきいたら四十圓位は出すだら
うと云ふからともかくも聞いて貰ふ事にした。然し頗る危ない
先づ用事迄　草々

十一月十八日　夏目金之助

森田白楊様

一五一

十一月二十一日　午前十時―十一時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
本郷區駒込西片町十番地畔柳都太郎氏へ（六）

拜啓五條氏書面拜見致候實は數藤斧三郎氏よりの依賴にて三名ばかり候補者を出し候うち二名は斷はり先方にても望まぬ樣子よつて殘る一名富山縣魚津に居る北鄕と云ふ人に電報にて問合せたる所行きたしとの希望にて其方まとまりたるあと故仕方なく候五條氏は聞き込んですぐ拙宅へ參られゝば相談も出來たものをと存候こんな事に紹介も何も入るものに無之候死活の問題に禮儀は古來より無之候。戰爭には道德さへ無之候。

君が御出ならいつ御出でになつてもよろしい。ちと遊びに來て下さい。但今週は木曜の外は長い御話しは出來かね候。創作をしてゐる譯には無之講義を作らうと思ひ批評すべき作家の作物をよみ始めたる所いやはや眼が二つでは一年もかゝりさうにて甚だ閉口致し候　以上

二十一日

金之助

芥舟兄

一五二

十一月二十三日　午後十一時―十二時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
麴町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ（四八）

拜啓傳四先生の原稿は先程送りました。手を入れると申しても大變ですから大體あれでいゝでせう。校正の時でも氣がついた所を直してやつて下さい。ホトゝギスの趣向はないのだがどうも長くなりさうで、さうして頗る複雜な奴が書いて見たい。所がどうも時間が足りないですがね。そこが困ります。もし充分の時日があつて趣向が渾然とまとまれば日本第一の名作が來年一月のホトゝギスへあらはれるのだが惜しい事です。

いそがしくて困ります。昨夜は大變面白かつた。毎木曜にあゝ猛烈な論戰があると愉快ですな。

一五三

十一月二十三日　午後十一時―十二時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より

府下巣鴨町上駒込三百八十八番地内海方野上豐一郎へ　(三)

拜啓中學世界の臨時增刊にある十三年前の英文科學生の寫眞中にあるのは正に僕である。後列の左から二番目に美髯を蓄へてゐるのが僕です。一番目は山川信二郎（原）といふ男である。混同しちや困る。あれは卒業したてのほや〳〵で髭も生やし立てのほや〳〵の所を不忍の長蛇亭の前で寫したのである。

同號にとし女といふ人が當世の文學者を評したなかに僕の事丈夏目先生といつて他の人は皆雅號を以て呼んでゐるのは、全體何物ですか。男がかりにあんな事をかいたものかと思つたらさうでもない樣だ。何で（原）商人の家に生れて云々とある。而して僕の作を愛讀するとかいてある。かう云ふ異性の知己を得た僕は幸福である。實を云ふと創作をやる時にかつて女の讀者を眼中に置いた事がない。女の十中八九迄は僕の作に同情を有して居らんと信じてゐる。其なかにこんな人がひよこりと出て來ると一寸驚ろかされる。而して風葉天外一派を罵倒して居る見識家だから猶驚ろく。どうか西村君に逢つたらあのとし子さんの事をもう少し聞いて置いてくれ玉へ。序に大に感謝の意を表したいものである　先は夫迄　不一

十一月二十三日

野上豐一郎樣

夏目金之助

一五四

十一月二十五日　午前十一時―十二時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區森川町一番地小吉館小宮豐隆へ　(五)

猫を早く上げやうと思つたが下女がぐづ〳〵して遲くなつた。風邪をひいても僕の講義丈出席してくれる抔は甚だ難有い。元來僕の講義はそんなに面白い筈はないのだから風邪をひいたらゆつくり葛湯でも呑んで寐てゐるがいゝ。僕がやすんだのは病氣ぢやない。去ればと云つて君が病氣だから夫に對して休んだ譯でもない。只やすんだのさ。靈の感應で僕がやすむなんて事があるものか。左程に僕を信仰してくれるのは難有いが君がそんな傾向を發達させると飛んでもない事になるよ。僕だからまだいゝが女が相手だと君は遂に其女の爲めに食ひ殺されて仕舞ふ。あぶない。君の樣な性質の人は可成反對の性質を養成しなくてはいけない。君も年頃だから今に戀をするかも知れない。其時に靈の感應なんぞばかり振り廻はしてゐると小宮豐隆なるものは地球の表面から消滅して仕舞ふ。僕も君位な年には靈の感應を擔いであるいたものだ。而して其〔御〕蔭でもつとえらくなる所をこんな馬鹿になつて仕舞つた。以來は決して靈の感應を擔いぢやいけない。ことに女に對して擔いぢや大變な事になる。世の中には感應を擔がせてひそかに冷笑する樣

な怖い女が澤山居る。僕だつて靈の感應を利用して君を嬉しがらせる位は出來る。然しそんな罪な事はしないから君もやめなくつちやいけない。さうして葛湯を飲んでね、日向へ寐て發句でも作つてるがいゝ。直つたら木曜に來給へ。先達ては大勢來て皆々議論をして面白かつた。

僕忙がしくつて困る。人に出來る事だと君にすけて貰ふがさうはゆかない。

君はあまり神經質だから今のうちにもう少し呑氣になつて置き給へ。今のうちに呑氣になるのは譯はない。僕がして上げるから毎木曜に必ず出勤し玉へ　以上

十一月二十四日夜

夏目金之助

小宮豐隆様

一五五

十一月三十日 午前十時—十一時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
牛込區早稲田南町三十番地大澤方片上伸氏へ（三）

拜啓御手紙を拜見しました。新年の早稲田文學へ執筆の義につき再應の御照會實は甚だ御氣の毒に存じて居ります。有體に申すと早稲田の方は逃れた積りで居りました。是から大學の講義が切れたから今年分を少々かき夫からホトヽギスの約束を果すうちに今年の文章事業は出來なくなる事と存じます。ホトヽギスの方も漸の事で十二月二十日〔迄〕待つて貰ひました。夫から學校の試驗をして文學論の校正をして大晦日迄働く積りであります。

其代りホトヽギスのあとでは屹度早稲田文學へかく積りで居ります。どうかあしからず思つて下さい。木曜に御暇なら御遊びに入らつしやい。此間は中井君（趣味の）が來てゐました　以上

十一月二十九日

夏目金之助

片上伸様

一五六

十一月三十日 午前十時—十一時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より
横濱市根岸町三千六百二十二番地久内清孝氏へ（一）

拜啓未だ御面會の機を得ず候處愈御清適奉賀候陳者今般はセロン茶一罐御惠投にあづかり難有拜受仕候。御宿所を檢するに濱武氏と御同宿の樣に見受られ候がもし御朋友にても候や御洩し被下度候